

# 野草雜記・野鳥雜記

野草雜記

柳田國男

青空文庫



## 記念の言葉

この二冊の小さな本のように、最初思った通りに出来あがらなかつた書物も少ない。私は昭和二年の秋、この喜多見きたみの山野のくぬぎ原に、僅かな庭をもつ書齋を建てて、ここを一茶いっさのいうついの住みかにしようという気になった。あたりはまだ一面の芒尾すすきお花はなで、東西南北には各々二三本の大きな松が見え、風のない日には小鳥の声がある。身の老い心の鎮まつて行くとともに、久しく憶い出さなかつた少年の日が蘇よみがえつて来る。私の生れ在所も村で

あつたが、家が街道端でこの辺よりは立て込んでいたために、山に入らぬと色々な鳥は見られない。里にいるのは無数の雀すずめばかり、鳶とびと鳥からすの他には空を横ぎるものがなかつた。雁がんも水雞くいなも時ほととぎす鳥も、すべて歌俳諧と版画とによつて知つたのである。これに反して野の草には友だちが多かつた。それがこの岡のまわりにも群を成してはいるのだが、幼ない頃に見たのとはどうも様子が少し違ふ。ということが一段と昔を偲しのばしめたのである。

たとえば「雀の毛槍」などは、私等が抽ぬいて弄もてあそんだのは、もつと茎が長々として花の総ふさが大きく、絵にある行列のお供の槍とよく似ていた。母子草ははこぐさもこちらのは、餅もちに入れるほどにもふつくりと伸びず、小さなうちにもう花が咲いてしまうのは風土のため

であろう。すみればかりは関東の野の方が種類も多く、色もずつと鮮あざやかなように思われるが、蒲公英たんぽぽもまた紫雲英げんげも、花がやや少なくなかつ色が淋さびしい。ただその埋め合せに野木瓜のぼけとか山吹とか、故郷で覚えていないさまざまの花が、この野の春色を豊かにしているのである。昭和三年の初めての春は楽しかった。もしも幸いにこの家に十年、何事もなくて住み続けることが出来たら、草の話を小さな一巻に集めて、子供や古い友人に読んでもらおうと、思い立ったのも早いことであつたが、まだその時には『野鳥雑記』には考え及ばなかつたのである。

鳥は旧友川口孫治郎君の感化もあり、小学校にいた頃からもうよほど好きであつた。十三歳の秋から下しもうさ総の田舎にやつて来て、

虚弱なために二年ほどの間、目白や鶉ひわを捕ったり飼ったりして暮した。百舌もずと闘ったこともよく覚えていゝる。雪の中では南天の実を餌にして、鶉ひよどりをつかまえたことも何度かある。雲雀ひばりの巢の発見などは、それよりもずっと早く、恐らく自分が単独に為し遂なげた最初の事業であつて、今でもその日の胸の轟とどろきが記憶せられる。小鳥の嫌いな少年もあるまいが、私はその中でも出色であつた。川口君の『飛驒ひだの鳥』、『続飛驒の鳥』を出版して、それを外国に持つて行つて毎日読み、人にも読ませたのは寂しいためばかりではなかつた。少なくとも私の鳥好きは持続している。この砧きぬたの新村の初期には、野は満まん目もくの麦生むぎいふであり、空は未明から雲雀の音楽を以て覆もつわれていた。それが春ごとに少しずつ遠ざかり、ま

た少なくなつて行くのに心づいて、段々に外へ出て鳥の声を求めるような癖を、養わずにはいられなかつたのである。そこへさして現れて来たのが、野鳥の会の中西悟堂君という無双の鳥好きとであつた。私は五十年も東京にいながら、まだ中国の土音どおんが抜けきらぬほど耳が悪く、また口真似くちまねが拙であるが、中西氏はその正反対で、従つてまた鳥の名を教える名人でもあつた。あの早起きと健脚には附いて歩けぬので、ほんの通信教授見たいな指導しか受けなかつたが、それでも少しずつ新しいことを学んだ。第一にはうちの近所の木にも、存外色々の鳥が遊びに来るということ、次には子供の頃に覚えたと思つてゐることに、かなり間違つていた点が多いということである。元来私は早合点たちをする質だから、

今だつてもまだ誤解があるかも知れない。がとにかくに氣を付けたり思い出したりする事が、これでまた一つふえたのである。

私の家では、始めには庭に何物をも栽<sup>う</sup>えない主義であつた。木は門を出ること数歩にして松でも何でもある。草は抜ききれないほど色々のもものが生える。どんなものが先<sup>ま</sup>ず生えて来るか、見ようと思つて空地にして置いたのだが、あまり土<sup>つち</sup>埃<sup>ぼこ</sup>りが立つというので芝を張つた。そうするとその隙間から顔を出したのが、隣の地面からの根笹の芽であつた。これは棄<sup>す</sup>てて置くと笹原になるから鋏<sup>はさみ</sup>で切つた。その次には職人が食べてほうつたかと思う梨の芽生えが二本、松が一本と片隅に合<sup>ねむ</sup>歡<sup>む</sup>の木とが生えた。これだけは約束だから成長にまかせ、もうそのあとは構わずに置くとよか

つたのだが、春になって気がかわって梅をたつた一本、竹垣の近くに移植したのが病みつきで、秋はその隣へ小さな木犀もくせいと山茶さざ花んか、安行あんぎょうからは富有柿ふゆうがきの若木が来る。いけて置いた丹波たんばく栗りが芽を出す。何やらかやら皆大きくなり、おまけに隣地の檜ひの木までが林のように茂って来て、目隠しにはよいが日陰が多くなった。幼な馴染なじみの草などは、大抵たいていは十分な日の光の中で育つものばかりだから、こんな処には見切りをつけて、ずんずんと野外に退却してしまい、家のまわりにはいやな草ばかりがはびこるうとする。雨でも降りつづいて五六日も出ずにいると、すぐに化物屋敷のようになって心までが荒びるので、近年は草取りが夏秋の日課になってしまった。人も草取りを日課にする年になると、

もはや少年の日の情愛を以てこの物に對することが出来ない。この変化は相応に寂しいものである。

よい草いやな草の差別は子供もするが、標準は違っている。かたばみは我々にとつては迷惑至極な草だが、彼等はあの葉の珍らしい形と、実が胡瓜きゅうりのようなのに興味をもつ。千なりほおずきなども怖ろしいやつで、うっかり一本を見のがすともう翌年は畝中に満ち、抜いても棄てても後から出てきて、小さななりをして花をもち実が熟する。どうして退治しようかと思うほどであるのに、孫どもはやつて来ると先ずそれに目を著ける。杉菜が畝に入ると飛び上るほども農夫が騒ぐのは、一つには根が深くて除きにくいつくしためもあるが、それがまた土筆採りの子供を誘引して、畝を

踏み荒される気づかいもあるからであつた。佇たたずんでただながめるだけなら、ああ美しいと思うような草でも、土地を再び曠野こうやに返すまいと思えば、精出して抜かねばならぬものが多い。それを承知の上で雑草の方にも、驚くような繁殖力、智慧ちえと名づけてもよいほどの対抗手段をもっていることが、子供でないだけに少しずつわかつて来た。触れるとすぐに莢さやが弾けて、遠くまで種子を飛ばすものがある。蔓つるが容易にちぎれて残りだけでまた根付くものがある。あるいは地獄蕎麦そばとも呼ばれる 草どくだみのように、悪く臭いので人を近づけぬものもある。環境に応じて大きくも小さくも、形を色々にかえて生きて行こうとする努力などは、ある草は全く知らず、他のある種には特に著しい。自然の始めからの配慮と言

おうよりも、何だかめいめいの発明の如くにも感ぜられる。自身庭に降りて直接の交渉に当るまでは、眼の前にながら丸で知らずにいた。子供でなくなつたということも必ずしもそう悪いものではない。私は今も草取りによつて少しづつ学んでいるのである。おかしい経験は人とこの話をして見たいと思うのに、大抵の場合合は草の名を知らない。金田一春彦君が二夏つづけて、かくしに植物図鑑を入れて教えに来てくれた。庭や門前の僅かな面積に、もう三十種に近い雑草が算<sup>かぞ</sup>えられる。それに一々名があつたことが、むしろ不思議なくらいに私には感じられた。これが日本の植物学の進歩なのであろう。畔<sup>くろだすいざん</sup>田翠山の『古名録』というような、最も綿密な本草書<sup>ほんぞうしょ</sup>を見ても、まだその中に掲げてない草が大分

あつて、それにも立派な標準語が附いている。ただそれを引用して素人同志話をしようとしても、相手も知らぬのだから間に合わぬだけである。話題になる草は昔から限られていて、それも少しづつ数を減じて行くのではないかと思われる。せつかく気のきいた佳よい名が出来ているのに、この毎日見るものをこんなとかこういうとか、面倒でしかも不精確な描写に任せて置いては、それこそ話にもならぬのである。今度の国民学校にも頼まなければならぬが、私の『野草雑記』も働かずにはいられない。ただそれには十年が少し短かすぎたというだけである。

小鳥の方でも実情はこれとよく似ている。私は近年の方言集をあさつて、かなり数多くの草と鳥の名を比べて見たが、多いのは

一つのもの異名のみで、その種類は不思議なほどにも限られて  
いる。久しくこういう話題の管理を、少年の手に委ねてしまつて、  
省みなかつたということも原因の一つかも知れぬ。もしそうだと  
すると今になって少しばかり、樹蔭で草をむしり鳥の声に耳を傾  
けようとしても、急にそう新らしい経験の得られぬのもやむをえ  
ない。それにまた彼等の社会にも、やはり免れ難い<sup>まぬか</sup>生活の変化が  
あつて、古い約束などは守つていられぬようである。草に外来の  
新種が幾つか加わり、または遠くから引移つて来たものがあつて、  
それが案外に幅を利かしているように、鳥にも新たな危険が多  
く、もう以前ほどは悠長でなくなつてゐる。四十雀<sup>しじゅうから</sup>でも藪<sup>やぶうぐ</sup>  
鶯<sup>いす</sup>でも、来たかと思つとすぐに行つてしまつて、遊んでいよう

とする心持が少しもない。殊ことに頬ほお白しろなどは嘔さえずりまでもかえたらしく、何だか一年増しに歌の声が短くなって、一筆啓上つかまつり 仕そ候うらう などとは、聴いてもらえそうもなくなつた。現在残っている幾つかの鳥の昔話は、どれも皆あの挙動や鳴声の写実味に根ざしている。もしもその根拠が揺ぐようだったら、後は幼ない者までが印象を拒むことになるであらう。新たななるものがいまだ生れず、古い心持は先ず消えようとするこの淋しい過渡期に、ちやうど世に出て行く記録だということが、前から少しでもわかつていたならば、また若干の用意もあつたであらうに、私は漸ようやくこの頃になつてそれに気付いたのである。いかに閑人の閑事業であつたとはいつても、あまりにその散漫であるのに私は恥じている。

今一つの思いがけぬ滑稽こっけいは、この住宅地の周囲の光景が、こんなにも變つて行くものとは私は考えなかつた。家を移した当座の数年は、二階の寢床から遙はるかに多摩川対岸の岡が見えた。その頃はまだ眼もよかつたので、いつとなく森や樹木の形に親しみをもち、何度か目標をきめて川を渡つて訪ねて行つたこともある。西の窓からは国境の連山がよく見えて、右の端は秩父ちちぶの武甲山ぶこうざんに大菩薩だいぼさつ、一度相模川さがみの流路でたるんで、道志どうし・丹沢たんざわから大山とがの尖とがつた峰まで、雪が来たり雲がかかつたり、四季時々の眺めには心を惹ひかるるものが多く、小鳥の去来ということも、終始これと結び付けて考えるようになっていた。それが一方は近くに高い家が建つてたちまち見えなくなり、一方は樹木が一体に成長し

て、僅かに葉が落ちてからちらちらと隙見すきみをするだけになった。南の正面には高い松の木が二本あつて、春は黒くろつぐみ 鶇こじゆけいや小綬こじゆけい鶏けいが来て啼ないた。二本合せると誠に好い恰好で、月があの方角から出るのだつたらなどと評判をしていたが、ある年の火事に遭つてその一本が枯れて伐きられ、残りは一向にくだらぬ木になり、鳥もまた段々来なくなつた。「たけに草」の目の覚めるような美しさを見せた西隣の空地は、ほどなく土が古びて再び芒すすきに占領せられ、今年はいよいよ隣組かいこんが開墾かいこんして大根を播まいてしまった。こんなに変つてしまうものなら、あの頃写真を撮るかスケッチをしてもらつて置くか、自分で画を学んでもまだ間に合う位であつたのに、何もしないで十年も経つてしまった。今頃どのようにその噂をし

て見ても、それが自分の感じていた通りに、描き出されるわけはないのであった。一度こういつた記念の書を出そうと思ひ立つて、それにいつまでも執とらわれていなかったら、あるいはもう少し安らかな、人を楽しましめる雑記が出来たかも知れぬ。私のすることにはいつもこんな失敗が多い。

## 野草雜記

## 一

この喜多見の原の家に住み始めてから、今度はもう第十回目の春が復かえつて来る。この間における草木の有為転変は、一つの巨大なる歴史であつて、これに比べると人はむしろ常磐ときわであつたとも言える。最初私たちは久しい町の生活に馴れてささやかなる庭前

の草をも容赦しなかつた。必ず「年々愁処生」というような詩の句を思い出して、それを成長させて置くことが、我身をはふらかすわざのよう<sup>に</sup>に考えていた。そうこうしているうちに道路は小砂利になり、または雨の後の泥にまみれて、根強いものまでが次第に退いて行つた。家のまわりの植物は萩が先<sup>ま</sup>ず衰えて、今では僅<sup>わず</sup>かに一<sup>ひとむら</sup>叢二叢が、譜<sup>ふだい</sup>第の家の子のような顔をして培<sup>つちか</sup>われている。黄なる山菊は残そうと思つたが、去年などはどうやら咲かずにしまつた。春の草では董<sup>すみれ</sup>がただ一種だけになつて、蒲公英<sup>たんぽぽ</sup>はもう疾く<sup>すく</sup>に姿を消している。そうしておかしいことには今生えようとして<sup>たいてい</sup>いる草は、大<sup>たいてい</sup>抵は主人が名を知らぬものばかりである。草の名の教育などは、我々は六つ七つの時から以後、絶えて与えられ

もせずまた受けようとしなかつた。それ故に幼ない愛着は永く伝わり、新たな感歎の時あつて催されると共に、測らずもまた人間の無識が、いかに多くの事蹟を閑却していたかを、心づかしめる機縁ともなるのである。

## 二

杉菜はこのあたりの畠を打つ人たちに、何よりも憎まれている草であつて、その根は地獄にも届いているように、戯れている者さえある位であるが、畠を切り均ならしたばかりの私の家の外庭には、毎年待っている子どもがあるのに、もう一本でも生えて来ようと

しない。全体どういふ場処に生えるものなのかと、気をつけて見  
てあるいと、時々は湿りがちな田の畔あぜにも、日蔭の多い若  
木林の端にも、驚くほど沢たくさん山の小法師の、並んで立つてい  
とがある。

そう条件はむつかしくないのだが、不思議に人間の住む  
所を避けて繁ろうとする。庭は全く人の踏む足の数がどこの土よ  
りも多い。それを彼等の開拓者が嫌うので、根や養いだけの問題  
ではなかつたのである。芒すすきなども性癖がこれとやや似ている。隣  
の空地ではある季節にはこれただ一色に蔽おほわれて、色々の虫の声  
を宿し、小路を隔てて一斉に袖を振る様子は、招くと言おうより  
もむしろデモンストレーションに近く、風が吹けば盛んに穂綿を

流して来るのだが、私の庭へは僅かな片陰以外、めつたに下りて土着しようとはしない。一時は熱心に闘つて抜き棄てたものを、この頃は一株移植して見ようかと思うほどになった。これとは反対に根笹は草に隠れて、地続きの一方の空地には覗いてのぞても眼につかぬのに、いつになつてもその根が走つて来ることを止めない。逕にも出れば芝生の中にも出る。垣根の下はもとより、中には五六間も飛離れて糸のような筍を抽きたけのこぬんでようとする。これだけは鋏を以て切つてしまわずにはいらぬのであるが、考えて見ると竹は人に最も親しむ植物の一つで、鳥であつたらどの位喜ばれたか知れない。

## 三

それからタケニグサもこの土地へ来てから、始めて気心のよくわかった野草である。郊外はどここの新建てでも、一度はこの草に劫おびやかされて、いかにも文化住宅の浅はかさを、思い知らされずにはすまぬような時期があるように見えるが、少し程過ぎると、これも薄すすきよりはなお素直に退散してしまう。今まで日本にこの草のあることを知らず、あるいは土方どかたぐさ草などというヒメムカシヨモギと共に、遠い国からでも渡つて来たもののように、思っている人の多いのも一つの歴史である。タケニグサの生活機会はかなり限られているようである。即ち土すなわを掘り返して日の光が一面に当

り、静かに進み寄る小草のまだ乏しい間に、たとえば植民地の最初の自然移民などのように、ここに暫くしばらの盛りを息づくのである。この植物の褐色の汁液には、少しの臭気がありまた毒もあると言われる。それよりも人に迫るのはあの熱帯風な大がら、時には見上げるほども伸びてしまうこと、及びこれほど数多くの種子が飛び散ったらどうしようと、思う位に実のなることであるが、これは全く魚の子のようなもので、大部分は無結果に消えてしまいうらしいのである。私の家でも三年ほどの間は、タケニ草を目のかたきに蹴飛ばすほどまで大きくは決してさせなかった。指の汚れるのを忍んで茎を持ってそつと引くと、するりと附いて来るようにして必ず途中で根が切れるので、一層憎らしく思われたのであ

つたが、めつたにはその古根が復活したのを見たことがない。今でも折々は種が飛んで来て、一二寸の芽生えを育てているのを見かけることがあるが、それはそれはいたいけで、垣根の外にいるいとこ従兄弟とは似もつかない。素性を知らなかつたら豆盆栽にでも、したくなるような姿をしている。それでも抜いて棄てるのは伝統と言つてよい。ちようどうわぼみ蟒蛇の昔語りがあるばかりに、きれいな小蛇が殺されるのとよく似ていて、こちらは更さらに記憶が生々しいのである。私は前かた上州の利根とねの奥に遊んでいて、偶然に路傍にこの草の一群を見たことがある。土工と日の光がたまたま同じ条件を設けたために、幸運な一粒がどこからか帰つて来て栄えたので、この時ばかりはさすがにあななつかしと、昔の敵を愛す

る気になっていた。流転はまことにこの一族の運命であつたかと思われる。それがあたかも今大都市の周辺に、やや引続いて安住の地を供与せられ、いわゆる第二の故郷を念がけている点は、むしろ著しく我々の境涯に似ていたのである。

#### 四

字引を引いて見るとこの草の本名チャンパギク、博はくらくかい落廻とあるのが我々を考えさせる。日本に最初からあつて名がなかつたか忘れたか。ただしは新種の雑草と同じに、物のまぎれに入込んだのが見つかったか。わざわざ名を添えて輸入するだけの、物好き

はありそうに思われぬのみか、それでは現在の分布を説明するところが出来ぬのである。元からあるものは一応は元からあつたと認めるのが自然だ。そうするとこの草が久しく注意せられず、もしくは注意する者があつても地方的で、これに全国俱通ぐつうの名を生ずるに至らなかつたと解して置いて、船載はくさいの証跡の後日出て来るのを待つより他はあるまい。自然と文学という問題は、この方面からも一度は近よつて見る価値がある。奈良や京都の郊外にタケニ草の繁茂する機会がなく、たまたま繁つていてもそれをただけうとしと感じて、来て見る文筆の士もなかつた限りは、記録に伝わるような本名は生れようがない。そうして記録の天然は人も知る如く、甚べだしく狭隘きはなはであつたのである。花ならば梅桜あや

めに菊、鳥獸なら鶯うぐい時とき鳥猪のししに鹿、まるで近頃の骨牌かるたの絵模樣が、日本の自然文学の目録であつたというも誇張でない。これは風雅の選択が嚴峻を極めて、些すこしく俗氣のあるものは吟詠の料としなかつたためのように、千年の長きにわたつて解しつづけていたのであるが、そればかりは何分にも信じられない。現在の文士などはもう大分自由なのだが、それでなお我々の間には、油絵に静物もてはやされる程度に、咏物の詩は起らないのである。一つには歌の詞形の短かいたためもあるが、主たる理由は一言でいえば知らなかつたのである。知らない故に歌になるような好い名前が生れなかつた。すなわち斥しりぞけたと言おうよりも断念したという方が当つているのである。

畔田翠山翁の『古名録』などを見ると、牡丹をフカミグサ・ハツカ草という類の五音節語は、何百というほども設けられている。名がなければ文学の生れぬのは当り前だから、これを試みようとした者は以前もあつたのだが、それが多くは我<sup>わがまま</sup>儘の、ちつとも適切でないものなので人望がなく、日本の言語として通用しなかつたのだから名誉でない。国に広汎なる文芸を起そうとするならば、先ず言葉の問題を一通り解決して置かなければならぬ。歌だから咏物の詩だから事はまだ小さいが、すべてがこの調子であつては我々の筆舌は束縛せられ、少し込入つた気持は上品には人に表示することが出来ない。いくら本名でもチャンパギクでは歌にならぬということが、偶然ながらも我々に大きな暗示を与えている。

それでこの線路を辿たどつて、もう少し前の方へ話を進めて見ようと思ふ。

## 五

日本に佳よい単語を増加して行こうという努力には、動植物学者もたしかに参加しているが、幸か不幸か彼等は散文家であるために、少しでも歌よみの苦勞を察してくれない。どこの国でも学名は本名でないのだが、我邦わがくにでは精細を旨とするの余り、二階三階を積重ね穴蔵をほり下げて、時には三十一文字と背競せいくらべをしようという長い名が作られている。殆ほとんど音語の終極の用途を、念

頭に置かぬ者の所行である。この状態で新七草でも投票すれば、選挙肅正などはとても望まれぬことで、誰しも上品な句や歌になりそうな名を持つ草へ、入れたくなるのは免まぬかれぬ弱点であろう。すなわちいつまでもあれは名が俗だなどと、負まけおし惜みをいつてあきらめるものが多いわけである。これに比べると郷土の人たちの附けた名は大抵はもつと實際的であつた。歌にもうたわれず文句の口拍子にも乗らぬような草の名は、生れたかも知らぬが承認せられてはいない。というよりもむしろ歌や文句の中から、孕はらまれたらうと思うものが多いのである。これは統計の上にも多分現れることと思うが、今まで最も普通であつたのは三音節、クサの語を下に添えて五字の一句をなすもの、次には一つのテニヲハの余

地を存して、四音六音でこしらえたものが多い。花とか鳥とかを附けて呼ぶ物の名もこれと同様で、かねて法則を意識していたのではないまでも、いわゆる語路ごろの悪い言葉は、忌んで採用しなかつたらしいのである。これが深見草ふかみぐさ一流の歌道のかぶれでなかつたことは、和歌には向かぬが民間のうたいものや童言葉に、びたりと合っているもの多いのを見ればわかる。潜む動機がもしもありとすれば、遠く溯さかのぼつて文と唱えとの、いまだ分れなかつた世に求めなければならぬのである。

## 六

そこで立戻つて再びタケニグサを説くことになるが、私はこの名のいつ頃からあるのかを考える前に、先ず以てある一つの野草に、どうして名を与える必要が起つたかを尋ねて見たい。最もよくある機会は効用の発見、薬や染料のために野山を分けて、これ一つを捜さなければならぬ時であろうが、今日普通にいう竹を煮ると柔やわらかくなるという説は、何分にもまだ信用が置けない。果して一人でもそんな実験をして見た人があるかどうか。確かめもせず語の解釈に供するのは悪いと思う。あるいはその点は事實に反するまでも、古人が誤り信じてそう名づけたのだろう。タケニというからにはそう釈とくより他はないと、思っている人があるかも知れぬが、それはもう少し多くの事実を知つてからでない、

我々には到底とうてい断言の出来ぬことである。そうそう自分たちの先祖をまちがえばかりしたように、証拠るくも碌ろくにないのにきめてかかることは、感心せぬ態度だと私は思う。

だから我々は先ずこの植物に対して、現在土地土地で与えている名前を、比べ合せて見る必要を認めるのである。いわゆるチャンパ菊の異名を知った土地はあまり多くない。最近に耳にしたのは三重と奈良県の堺の山村でゴウロギ、ゴロはあの地方でも大きな石のごろごろとしている処のことだから、そのゴロによく生える木という意味に解してよかろう。東京京都の人だけは知っておらぬらしいが、ゴロもゴウラも全国にわたって、かかるぎょうかく礪り不毛の地をそう呼んでいる。起りは多分岩くら、くらししなどの

クラであろう。日本人はこういう語の用途を分化させて行く場合に、いつもいやなものだけを濁音にする癖があるようだ。現にこの土地でも土と交った小石の堆積している処はガラ、大きな石のある処だけをゴロということと、この二つの語は別々とも考えておらぬようだから、つまりは少しでも似つかわしい音に偏かたるのである。信州の上伊那かみいなから来ていた青年は、国ではタケニ草をガラガラというと言った。その時にはこの植物がうら枯れて後に、秋の風に吹かれる様子を形容したものかと思つたが、あるいはその気持は加わっているにしても、やはり発端はまたガラに生える草というにあつた。それが大きくなって木のように見えるからゴウ口木で、この程度の一致ならば、別に一方から伝えなくと

も、偶然にも起り得たのである。

## 七

越後の西頸城にしくびぎ地方で、この草をツンボグサというわけはまだはつきりしない。土地の人ならばまだその命名の気持を覚えているかも知らぬが、福井附近などで芒すすきの穂をミミツンボというのと、あるいは関係のある言葉かと考えられる。これとても竹を煮て軟かくするという噂と同様に、かつてその経験をした者はあろうと思えぬが、何だか気になつて近よつて行けない故に、軽々しくそういう名前が承認せられることになつたのであろう。

下しもうさ総印いんば旛

郡の草原地には、あるいはまたドロボノシンヌギという名も行われている。これも一つだけ聴くとあまりに奇抜だが、以前の笑いの材料には尻という語が多かった。例えば細菌ほそいをサギノシリサシ、近頃入つて来たと思うりゆうぜつらん竜舌蘭をヌスビトノシリサシといい、こまかな針のある「とげそば」という湿地の草の一名を、ママコノシリヌグイと呼んでいる人もある。以前は尻拭いには木や草の葉を用いたので、泥棒ならばこれを用いるだろう。もしくはこれで沢山だという意味からでも、半ば戯れにこういう名を案出せられ得たのである。立会つて竹を煮させて結果を見た人だけが、タケニグサの命名に参加したと、見なくてもよい一つの理由である。

それからもう一つは私などの郷里、播磨はりまの一部にはオオカメダ

オシという方言がある。狼がこの草を食うと酔うて倒れるから、  
こういう名が生れたように説明する者もあるが、この経験などは  
いよいよ以て試み難いものである。狼が草を食うということが既  
に考えられず、それを見ていて酔っぱらうのを確かめた人などは、  
搜しまわるだけのものはないのである。ただ自分等がこれによつ  
て感ずることは、もしもタケニ草の故郷が外国であり、または早  
くから現在の地であつたならば、こういう名は恐らく発生しな  
かつたろうということである。伊勢・信濃のガラ・ゴウロギも同じ  
ことだが、この異様な植物はもと狼でも棲息しそうな地にあつて、  
予め今日あらかじの郊外居住に備えていたのである。ただ人間が彼等の存  
在に注意し始めた機会がまちまち区々であつて、こうして私のように昭

和の時代に入つて漸くこの一つの生活に美しい意義を見出した者  
 さえあるのである。詩の發展はすなわち無限であらうが、それは  
 今少しく未知の自然の方に、眼を向けかえなければならぬように  
 考えられる。言葉が制限であり、習慣が附け紐である限りは、要  
 するにそれはただ蕪村ぶそんのいわゆる「水桶にうなづき合ふや瓜茄子なすび」  
 である。

## 八

そんな憎まれ口をきくのが私の目的ではなかつた。チャンパ菊  
 の異名に今一つ、辞書にも認められたササヤキグサというのがあ

る。物にも似合わぬ佳い名である。この言葉については色々の空想が起る。たとえばあの鈴なりになった枝の種子が、風に吹かれて幽かに鳴るのかとも思われ、かす実は私もその音を聴いたような気さえする。しかしこれは明かに空想であつた。種は柔かな綿のようなものに包まれて静かにこぼれている。そうして梧桐あおぎりのようなあの大きな葉は、がらがらならともかくも、ささやく音は立てようとも思われぬのである。比較はどこまでもして見なければならぬ。東京の近くでは相州の津久井つくいの山村などが、どこでもタケニ草をササヤケといっている。即ち遠くから見てもこの草の連なつた穂先が、笹に似てやや焼けたような色を帯びていることが、この名の与えられた元の動機であつたらしいのである。これをササ

ヤキ草と横なまる位のことは、少しく風流心のある者ならば誰にでも出来る。まして適切でもない色々の文芸用異名に、久しく馴らされている人ならば喜ぶかも知れない。ただ私たちはまだどこにそういう語の行われているかを知らぬだけである。これがもし東京の現象であるならば、やがてはまた普及しかつ新たななる解説が副<sup>そ</sup>うことであろう。大よそ一通りこの事情が伴っているの上ならば、それを観察しているのも決して興味のないことでない。

近年私の家の庭から追払われたタケニ草は、僅<sup>わず</sup>かな道路を隔てた西隣の空地に往<sup>い</sup>つて今は住んでいる。ここも芒<sup>すすき</sup>が一年増しに根を張つて来て、それと昔から仲のよい萩や「われもこう」の、咲きまじった野原に復<sup>かえ</sup>ろうとしているが、まだその片端には普<sup>ふしん</sup>請で

土を動かした部分があつて、そこばかりは堂々たるタケニグサの林である。タケニという言葉もあるいはこれから出ているのかも知れぬ。梢こずえが伸びきつてことごとく茶色の細長い花はな莢さやを附けたところは、山の野生の小竹原を思わせる。竹にもややこれに似た色彩を見せる季節があるような気がするがまだ確かなことは言えない。とにかくにこのようによく嫌われる草にも、美しく見える日が二日か三日はあつて、それが最も竹らしく感じられる時でもあつた。ちょうど初秋のしつとりと露の置く晩方などに、立止まつて見ていたような気持になつたことも折々ある。それよりも忘れ難いのは夜の引明けに、二階の寢室の窓を開いて、ああ美しいと思つて見たことが何度かある。それが雨でも降るか荒い風で

も吹くと、すぐにもう狼藉ろうぜきになつてしまふのである。郊外の朝と夕方は存外に多事なもので、私は氣樂だからこんなものにも目を留めているが、省みられぬ場合の方が多しと思ふ。そうして去年まで確かにそうだったが、この夏はもうどうなつてゐるかわからない。

## 九

たった十年ばかりの、しかも飛び飛びの觀察などは、今の植物学に逢つてはかなわぬにきまつている。しかし私は前に述べた事実に拠つて、今は大よそこれだけの歴史を推測してゐるのである。

このタケニ草の最初の郷里は、むしろ人げの少ない山中であった。山が崩れたり水が荒れたりすると、何よりも早く飛んで来て、そこに芽を吹くのはこの草の種子であった。日本は地変稀まれでない国だから、順にそういう処をまわっても、血統は絶えなかつたらしいのである。それが近年は土地利用の型が變つて、人里近くにも遊ばせてある場処が出来、それも底土を切つたり覆くつがえしたりする故ゆえに、追々おいおいと彼等の進出が始まり、少くとも都会の周囲では、いわゆる異国情調を発散するようになったのだが、元々お互いによく似た身の上である以上は、これはただ我々の忘却、もしくは最初からの無関心以外の、何物をも意味しないのである。我々の先祖も山に抛り、山あいの小さな空地のみを捜し求めて、末々その

後裔こうえいがこんな海端へいぶの平蕪へいぶの地に、集合しまた放浪しようとも思わなかつたことは同じだが、人間の長所は次々の境涯に応じて組織を拡大し生活ぶりを変え、新たな名称を認め新たな美德をたたえるに急であつた余り、古い縁故のある若干の天然を疎外し、また時としては敵視しなければならなかつたのである。しかし夕ヶ二草の世もまた開けた。人と交渉する言葉は多くなり、それがまた追々と耳に快いものとなろうとしている。この落莫らくぼくたる生活があわれを認められ、終ついに人間の詩の中に入って来るのも、そう遠い未来ではないように思われる。

## 蒲公英

## 一

春になって郊外の路をあるくたびに、何度となく考えて見たことであるが、タンポポは日本の昔からの野の草だ。これが新らしい春の日の光に耀かがやいて、黒い土の上に咲いているのを見て、眼を怡よろこばしめなかつた人はなかつたろう。そうすれば必ず名があつた

はずである。歌を詠まなかつた万葉時代の我々は、果してこの草を何と呼んでいたろうか。以前佳よい名があつて不幸にして忘れられたか。ただしはまた歌に向かないタンポポが古語であつたために、こうしていつまでも子供にしか省みられないのであろうか。我々の物の名は誰が作り、誰がこれから先は管理して行くのであろうか。こういう答のない色々の問が、今ではまだ野に充ちているように思う。

学者が都市に住んで標準語というものを守り立てるまでは、タンポポという草の名の行われていた区域は案外に狭いものであつた。それが今日のように流行したもとは、あるいは京都の子供の力であつたかも知れない。地方には今でもまだ幾つかの、大人が

附けたかと思う名称が、何となく押込められて残っている。それが懸<sup>か</sup>け離れた遠くの土地において一致しているのは、偶然とは言い難いように思う。そういう中からあるいは今一度、昔使っていた尋常の日本語を、見出すようなことがないとは言われぬのである。

たとえば千葉県では上総<sup>かずさ</sup>の各郡にわたって、蒲公英<sup>たんぽぽ</sup>をニガナという方言が行われている。以前春の野の草を野菜として摘んでいた頃には、確かに苦いということがこの植物の特徴であったろう。鹿児島県でも奄美大島の北の村々はやはりこの草をニギヤナとい、にがいから苦菜だと説明せられている。

それから今一つ、分布の更<sup>さら</sup>に弘い方言がある。岐阜県では山に

属する北半分、信州でも主として北信の諸郡において、クジナと  
 いつているのがそれである。俳諧寺一茶はいかいじいつさの『方言雜集』の中にも、ちようどあの人を咏えいじたような、一章の白うすうた唄を書き留めて  
 いる。

男やもめとクジナの花は盛り過ぎれば御坊ごぼとなる

この御坊すなわは即ち坊主で、何なんびと人もすさめざる淋さびしい人のことであるが、この草の花が綿わたになつて飛んだあと、あたかもがつそう  
 のような頭になる点が似ていたのである。

クジナという名詞もまた飛び散つて奥羽おううの処々に行われている。  
 例えば宮城山形の二県の南半分でクジナまたはグジナ、九戸くのへの葛く  
ずまき卷附近ではクジツケアともいつている。羽前うぜんも米よねざわ沢あたりは

タンポポに近い花の名が別にあつて、嫩<sup>わか</sup>い葉を食料にする場合ばかり、クジナという語を用いるのである。越後でもグズナは野菜としての蒲公英の名であつた。多分は北信などの白唄と同様に、元はタンポポもクジナの花で通つていたのであろう。

佐渡にもクチクチナという村がある。土地によつては稀<sup>まれ</sup>にはクデナという処もあるらしいが、その方は転訛<sup>てんか</sup>である。『倭名<sup>わみょうしよ</sup> 倭名

鈔<sup>う</sup>』には蒲公草和名フジナ、またタナともいうとあつて、タナの方は今は痕跡もないが、力行と八行とは、日本ではもと紛れやすい音であつた。即ち少なくともかつてある時代に、京都の上流の間にもクジナに近い語は認められていたのである。ただし何<sup>なにゆ</sup>故<sup>え</sup>にこの草をフジ菜といつたかは、今はまだニガ菜のよう<sup>あきら</sup>に明

かになつていない。『和訓栞<sup>わくんのしおり</sup>』には藤菜の意味であろうとあるが、少しも根拠はないのだから解説でも何でも無い。それよりも今一足遠くへ尋ねて行つて、更にこれ以外にどんな名前があるかを、知つて置く方が私たちには楽しみである。しかしこうした氣の永い穿鑿<sup>せんさく</sup>には果して世間の賛同が得られようかどうか。いつも一人で野中の路をあるいている者には、一向<sup>いっこう</sup>に見当が付かぬのである。

## 二

タンポポの代りに行われている方言は、まだ幾つでも意外なも

のがある。信州でも山を越えて諏訪<sup>すわ</sup>の湖岸に下ると、そこにはクジナもあるがそれよりもガンボウジの方がよく知られている。甲州でも国なかの平野はガンボウジ、伊那<sup>いな</sup>も上下二郡がすべてその通りで、飯田の城下にはまたガンボという語もある。クジナの行われていた善光寺<sup>ぜんこうじ</sup>平などにも、やはりガンボジという名が知られているのを見ると、これは花の方をさしていたものらしい。私の今の想像では、ガンボウジは子供などの頭の「おかつぱ」のことであって、あの愛らしい花の姿を、形容した語ではなかったろうかと思う。これとよく似た例は白頭翁<sup>はくとうおう</sup>、歌にオキナグサという花の名の、土地さまざまの変化であるが、それは他日また別にお話をして見たい。とにかくこれとクジナとの間には、最初

から語原の關係はなかつたようである。

その次には越後の弥彦山やひこやまの麓ふもとの村などに、ゴゴジヨウという

のがまたタンポポのことである。これは諏訪あたりのガンボウジ

と、あるいは系統を同じうしているかと思うが、それもまだ変化

の路筋を考えられぬ。同じ例は遥はるかに飛び離れて、南秋田の八はちろ

郎うがた潟の岸の村々に、ゴゴロツコまたはゴゴという語があるのは

妙であるが、現在はまだこの二処以外に蒲公英をゴゴ、もしくは

これに近い音で呼んでいる地方は知らない。

同じ秋田県でも北秋田郡の一部はクマボ、山本郡ではクマクマ

という土地がある。青森県も二つの市を始め、津軽は全体にクマ

クマという村が多く、ただ北端の小泊こどまりなどにおいて、これをカ

コモコまたはクワモコといっているのである。あるいはアイヌ語からでも出たのではないかと思つて、念のためにバチエラー氏の辞典を引いて見たが違つている。福井県の南条郡にはカツポコという例があるが、これはむしろ後にいうタンポポの変化であつて、カコモコとは縁がないようである。

何にもせよ今は名の起つた理由までが、丸で不明になつているのだから、歴史を問うことが殊ことにむづかしい、ところが他の一方にはなお色々の方言で、どうして出来たかを想像し得られるものが残つている。誠にたわいもないことではあるが、それをはつきりと知つて置くと、後に類推によつて思ひの外ほかの解説が成立つかも知れぬ望みがある。先まず一番わかりやすいものから言うならば、

信州北佐久郡きたさくの一部で蒲公英をチチグサ、これは疑うたがもなく乳草であつて、あの花茎を折つて白い汁したたの滴るのを、母の乳房に思い寄せたのである。作者の髭ひげ男おとこでなかつたことだけは断定しても差さ支しつかえはあるまい。加賀の金沢でこの花をヤケドハナというところ、私に教えてくれた人もあるが、もしあるいはヤイトバナの記憶ちがいではないか。もう一度別の人に聞いて確かめたいと思つてゐる。自分などの幼い頃には、タンポポの茎を折つて折れ口を肌はだに押すと、小さな円い乳の輪が出来る。その上を麦の黒穂で叩いて、ちようどお灸きゆうの跡のようになるのを、ヤイトをすえるといつて遊んでゐた。しかしそのためにヤイト草という新名を、この草に付与した実例はまだ聞いていないが、チチグサという方は信州と百

数十里を隔てた、広島県の倉橋島くらはしにも同じ例があるのである。

それから今一つ児童の命名になるかと思うのは、相州愛甲郡あいこう煤ヶ谷すすの山村などで、蒲公英をピーピーバナ、東上総の海岸でピンビバナというもので、これはあの茎を切って草笛を作って吹いた者の、記念であつたことは言うまでもない。西の方では摂州の有馬郡などで、シービビといったのも同じ趣旨である。私の在所はそれから十四五里も離れた処であるが、シービビというのは青麦の茎を折って、吹きならす笛であつた。子供によつては麦の黒穂のことを、シービビと思うのだと思つている者もあつた。そうして自分もまた口でシービビと云つて吹くためか、私たちの耳には明瞭にそれがシービビと聞えたのである。

## 三

紙やセルロイドの色々な玩具で育てられた人は殆ど想像も出来ぬ話であるが、以前の子供は春の立ち帰るを待ち兼ねて、こうして銘々めいめいの遊戯材料を求めたのであった。人が天然と仲がよくなるのも、本当にそれだけの理由があつたのである。しかもその玩具が時々の流行を追うたことは、昔もやはり今と同じであつた。その中でも起原が古く、何度も時を隔てて戻つて来たかと思うのは、タンポポの茎を折つて両方を少し割り、それを水の中に入れて、その外皮のまる丸く反りかえるのを見ている遊びであつた。子供

でなければそのような気の永い見物は出来ないと思う。これも上総の幾つかの郡において、今でもニガ菜の花をマンゴマンゴといっている。それがいかなる理由から、そう呼ぶかを知らぬ人も多くなつたが、百年ほど前に著されたふかがわもととし深川元儁の『三州漫録』にその説明がしてある。市原郡の立野たちのという村で実見したと言っている。小児は蒲公英の莖を割さいて置いて、「まんごまんごまがれ」という文句を唱える。そうすると草はあたかもその号令に従うかの如ごとく、徐々として曲つて来るのであつた。これから遠く離れた愛知県の宝飯郡ほいぬかた額田郡、また幡豆郡はづの一部においても、タンポポをマンゴと呼んでいる土地が今でもある。更に西の方に行つて大分県玖珠郡くすの山村にも、この草をマンガレと称する処がある。

時を同じうしてこの遊戯が流行したのでないまでも、とにかくにいつの頃にか九州にも「曲れ」という唱えごとは用いられていたのである。

沖縄の諸島を見渡すと、タンポポの方言の今存するものは案外に乏しい。八重山と宮古との中間にある多良間たらまという寂しい孤島では、この草をトウルクナーというそうであるが、その意味は

『倭名鈔』のフジナと共に、もう私たちには判らわかなくなつた。それから琉球の本島まで戻つて、一ばんよく知られているのはワーオーバー、ワーは即ち家猪かちよのことで、本来はこの獣の鳴き声から出た名である。だからワーオーバーは「豕ぶたの青葉」だと思つている人も多いらしいが、果して蒲公英を豕に喰わせるかどうかは確

かでない。那覇なはの周囲その他のある村々では、これをマーウーフ  
アーという者もあり、それを真大葉の意味だと説明してくれた学  
者もあるが、この二つの語はもと一つらしいから、かえって双方  
の解釈の共に誤っていることも危あやぶまれる。それから今一つ、これ  
もやはり那覇附近にナガリールーという方言があつて、これは児  
童の国語かと思われる。沖縄音ではmが殆ど常にnに変化し、例  
えばイマ（今）をナーといい、ミヤグスク（宮城）をナーグスク  
と発音している。だから恐らくはまたこのナガリールーも、「曲  
る」という語の命令形であつて、近世この島でもタンポポの莖を  
曲らせて、嬉きし笑しょうする童戯が行われていた痕跡であろう。

上総はどういうものか、妙にこの植物の異名が多かつた。茂原もばら

の近くではあるいはオヤコウコウバナともいうと、これも深川氏の『漫録』に見えている。私の想像ではもとは有名な昔話などがあつて、それでこのような名が行われることになつたかと思うが、とにかく親孝行という理由は、この花がよくお使いするからであつた。信州の子供たちは、タンポポの花の白く綿になつたものを手にとつて、「お坊お坊<sup>あめ</sup>飴買に行け」と言いつつ、ふつと吹飛ばせて楽しむということが、小山真夫氏の『<sup>ちいさがた</sup>小 県 民謡集』には見えている。私の生れた瀬戸内海の浜近い村にも、これと同様の遊びはあつたが、唱えごとは全くちがつていた。今でも思い出すのは春の青空にあの花をかざして、幼ない子たちが皆一様に、「あーぶら買いに酔う買いに」と言つて、あの花の穂をふつと吹

いた。蒲公英の種子は細長く下ぶくれで、少しばかり徳利の形に似ていた。あれが空中に飛び散って行く様子を見て、我々は子供が徳利を手に下げて、酢や油を買いに行く姿を思ったのである。そうしてこの遊びもまた弘く行われていたと見えて、対馬つしまの島の浅藻あやもという村でも、やはりタンポポを「酒買い坊」といつている。

## 四

多くの野の草が稚おきなご子を名付親にしていたことを知って、始めてタンポポという言葉の起りが察せられる。タンポポはもと鼓つづみを意味する小児語であった。命名の動機はまさしくあの音の写生に

あつた。それが第二段に形の鼓と近い草の花に転用せられることになつたかと思われる。小野蘭山の『おのらんざん本草綱目啓蒙』に、蒲公英を越えつちよう 中国でツツミグサというとあり、しかもこの地方でタンポポというのは、花生けその他の竹の筒のことであるのを見ると、やはりあの鼓の音も元はタンポポと聴いたのであつた。中世盛んに流行した歌問答の昔話にも、西さいぎよう行とか宗祇そうぎとかいう旅の歌人が、摂津せつつの鼓の滝に来て一首の歌を詠んだ話がある。

津の国の鼓の滝を来て見れば川べに咲けりたんぼぼの花

そうすると傍に草刈りの童子がいて、第三の句を「うち見れば」と改めてくれた。宗匠自慢の鼻はたちまち折れ、その童子の何とか明神の化現けげんなることを知つたという類の物語、これを詳しく説

明することは退屈だが、とにかくこの話の出来た頃までは、人がタンポポの本は鼓もとの名であることを知っていた。後年この楽器の流行がすたれて、小児は名の起りをもう忘れてしまったのである。タンポポとよく似た名の付け方は、なお他の色々の楽器にもあった。例えば越中から越後の平野にかけて、お寺の本堂の大きな鏡鉢にようばちをガンモモ、家々の仏壇の小さな鉦かねを、チンモモというのは普通の語である。ガンとかチンとかいったばかりでは、幼ない人たちにはこれをあの音の形容と認められなかった。余韻しほの暫らくの間モモと続く所までを、ぜひともその名称の中に取り入れなければ、彼等には気がすまなかつたのである。ところがいよいよ本堂の大鉦をガンモモと呼ぶことにきまつて、また暫らく経つと

今度は形の似たものにこれを転用する。越後の奥から信州北部にかけて、櫛かしの実のうてな、我々がドングリのオワンといい、または戯れて花嫁のごうしなどと呼ぶものを、子供は皆ガンモモといっている。寺の饒鉢とは大小の非常な差があるが、形だけではないほどよく似ている。蒲公英のタンポポになって来た順序も、全くこれと同じであったと思う。

あまり長くなる故ゆえもう今回でこの話はおしまいにする。小児はタンポポの最初の発明者ではあるが、決して我等の如くいつまでも自分の手柄を記憶していない。鼓というのが三河の万まんざい歳以外に、使う者がないようになれば、後はただタンポポの音の快さと、その花の鮮あざやかな色とを楽たのしむばかりで、言わばその次にもっと面白

い名前の、現れて来るのを待っているのである。そうして成人のようにいつまでも、無意味なる符号を守っていることは出来なかった。だから少しずつ新意匠を加えてこの音を変化させようとしているのである。

タンポポは私などの国ではタンポであった。近畿の府県ではあるいはタンポコといい、またはタンポンといった。東海道でも駿<sup>す</sup>河<sup>るが</sup>ではタータンポポまたはタータンバ、伊豆の入口の方はタンタンポ、奥伊豆に行くとタタンポコ、相州の三浦ではチャンポ、甲州の東<sup>ひがし</sup>八<sup>やつ</sup>代<sup>しろ</sup>はチャンポポ、上州<sup>みょうぎ</sup>妙義山<sup>さん</sup>の周囲はチャンポコ、それが日本海上に飛んで佐渡の<sup>そとかいふ</sup>外海府もチャンポンポン、同じく河原田<sup>かわはらだ</sup>ではチャンチャンポンポンとさえいつている。

私たちの今住む三多摩地方には、タツポまたはタツタツポという例がかなり多く、これもまた一筋東北の方に向っている。その中の最も大きな変化は、岩手・青森・秋田の三県においてテテポポまたはテデツポツポなどという例である。南部の九戸くのへではデデポツポ、北郡の浦野館うらのだてはデテココ、羽後うごでも田沢湖岸はデデポツポであるが、横手・横沢あたりはテテポツポといっている。ポツポは恐らく鳩の鳴き声で、これも今までタンポポ一類の名が、余りに意味がないために、出来るだけ鳩の声に近づけて聴こうとしたのである。こういう心の願いは小児には常に多い。後に述べたいと思うツクシという春の草なども、今では秋の蟬せみのツクツクホウシと、その名をおもやいにしようとする子さえあるのである。



## 虎杖及び土筆

### 方言量の多少

近世始めて海外から持込まれた物品だけには、あるいは一種特別の法則が働いていて、そのために必ず存在すべき方言の分野を、紛乱させたのではないかとうたがい疑はあり得る。しからば国土の開発以来、この民族と相あいおい生せいに今も伝わっている山野の草木はどうあ

るか。何よりも先に我々の注意すべき一事は、松竹梅桜の類が古  
今南北を一貫して名一つであるに對して、一方にはここに説かん  
とする虎杖いたどりまたは土筆つくしの如く、丘を越えるともう異なつた称呼  
を、帯びているもののあることである。方言何によつて起るか  
という問題は、当然にそこまで溯さかのほらなければならず、方言の区域あ  
りという論者もまた、この顯著なる新旧の共通を黙過するわけに  
は行くまい。

時が方言を造るといふごく普通の想像は、命名の本意が段々に  
忘れられやすく、忘れると新しいものに移りがちだという一点か  
ら見れば當つている。しかし現存の古語にはいかなる語原家でも、  
こじ付けあたわざるものが多数なるにかかわらず、それは一種の

符号となつて後生大事に守られているのである。そうして他の一方では分り切つている名称が、次々取替えられて來ているようである。<sup>すなわ</sup>即ち單語そのものにも特に異稱を招きやすいものと、そうでないものがあるのではないか。もししかりとすれば、その理由を目的物の社会的地位、もつと具体化して言えば人とその物との關係如何<sup>いかん</sup>に求めて見るのが順序であらう。もちろん古くからある言葉ほど、変化の機会は多かつたわけだが、事によるとその變<sup>へ</sup>遷<sup>せん</sup>は後々のものでなく、最初から名前沢山<sup>たくさん</sup>に生れ付いていたのかも知れない。内容は正しく固有のものであつても、稱呼はそれぞれの入用の時を以て<sup>もつ</sup>始まり、それが一処一人の制定に基づかぬという点は、近世船舶<sup>はくさい</sup>載の商品なども異なる所はないはずである。

虎杖の方言歴史に關しては、幸いにして記録の徵証が存留する。『枕の草子』時代の京都語がイタドリであつたことは、かの『枕の草子』の、「杖無くてもありぬべき顔つきを」という奇警なる一文章によつて熟知せられる。それから遠く溯つて反はんぜい正天皇紀の注記に、「多遲たちひの花は今の虎杖の花也」とある虎杖も、この書の出来た時代には多分またイタドリであつたろうが、別になおタチもしくはタチヒという語は伝わつていたのである。方言は必ずてんか転訛と解し、そうでなければ異民族語の混入と見ようとする人には、この系統を説明することが既に容易でない上に、これを右二つの史料に拠つて、単なる新陳代謝の例と認めることも事實が許さないのである。という理由は至つて簡明で、現在においてもイ

タドリとタチヒとは虎杖の日本語として弘い区域に行われ、過去少なくとも千数百年の間、時の影響を受けて変化してはいなかったからである。そうして仔細しさいにその錯綜さくそうの跡を検すれば、二語は久しく併存し、その択一は単なる小区域の流行であつたことが知れるからである。即ち将来せんめい闡明せられねばならぬある法則によつて、方言はいわゆる古典の時代から、著々として発生しつゝあつたことが推測し得られるのである。

## 理由ある新語作製

記録保存の意味において、煩わしいけれどもやや多数の実例を

挙げて置きたい。先<sup>ま</sup>ずイタドリについていうならば、その北方の限界は越後であり、南端は土佐の海に及んで、中間にタチヒの領域を包み、九州には僅<sup>わず</sup>かなる浸<sup>しんじゆん</sup>潤の痕を見るのみである。関東平原の例はなお乏しいが、少なくとも武蔵にはもうこの名は知られている。

イタンドリ

武蔵秩父郡<sup>ちちぶ</sup>

イタンドリ

同 西多摩郡氷川<sup>ひかわ</sup>

イタドリ

伊豆神津島<sup>こうづ</sup>

イタンドリ

駿河梅ヶ島<sup>するが</sup>

イタンドリ

遠江御前崎その他<sup>とおとうみ おまえざき</sup>

イタンドリ

三河長篠等<sup>ながしの</sup>

イタンドリ (エドズイコ)

信州諏訪以南すわ

イタンドリ

飛騨吉城郡ひだよしき

エダドル (エダロベ)

越中上かみにいかわ新川郡

イタンドリ

志摩船越

イッタンドリ

伊賀比自岐ひじき

イッタンドリ (スカンポ)

大和月ヶ瀬やまと

イタズロ (ゴンパチ)

同 吉野北山

イッタンドリ

山城伏見

イッタンドリ (イタイトリ)

丹波福知山ふくちやまその他

エツタンドリ

同 多紀郡たき

エタンドリ

播磨加東郡はりまかとう

イタズリ

淡路沼島

イタズリ（イタンポ）

阿波一宇いちうその他

イタンドリ

周防田島すおう

イタンドリ

石見那賀郡いわみなか

イタイドリ

同 太田町

イタズリ（スイジ）

伊予今治市いまばり

イタズル（イタンポ）

同 喜多郡

イタズリ

土佐幡多郡はた

イタズリ

同 沖ノ島

イタドイ

薩摩長島さつま

以上の区域外にもイタドリといつて通ずる土地はなお弘いが、

それが在来の語か、はた新たなる匡きょうせい正もとづに基くものかを、確かめ得ざる場合が多い。信州北部などはこれに反して、幾分著しい転訛があり、また何とかしてこれを解しやすい語に、改めようとする傾向は他の地方にも見られる。実際むつかしい名前には相違ないのである。

イタンドロ (イタンダラ) 信濃ひがしちくま東筑摩

イタンドコロ 同 松本市

イタコン 同 小ちいさがた郡一部

イタズイコ 同 下しもみのち水内郡等

イツタンダラケ 飛騨高山

エツタスイスイ 近江おうみ一部

エツタノゾウリ（スカンポ） 大和五位堂ごいどう

イタロウ

石見波子はし

これ以外に特に注意するのは、阿波あわの山村や伊予・土佐の各地に、これをイタンポまたはイタンボという例の多いことである。

信州の下水内郡のイタズイコなども、スイコは東京でいうスツパグサ即ち酸模すいばのことであるらしいから、イタドリのイタは元来独立して、この植物を意味していたのかも知れぬ。イタンポの後半はスカンポなども同じように、もと小児の間に行われた一種の愛称らしい。虎杖をスカンポと呼ぶ区域も相応に広く、北は越後東は上総、西は瀬戸内海の沿岸に及んでいる。京都郊外の村でスツポン、佐渡そとかいふの外海府でスツポンポンまたはポンポンスイカ、豊ぶ

前の宇佐郡ぜんうさでもスツポンポンというのを見ると、山でこの植物を折取る時の興味が、スカンポという語の人望を助けたかと思うが、それは必ずしも最初からの意味ではなかったようで、上総・下総などで単にスカンポというのは、本来はスカナ即ち酸模のことであつた。

少なくともスカンポのスカは酸いということ、人は先ず里近くに多いスカナからこれを経験し、後に山中の同類にまでその名を推おしおよ及ぼしたのであつた。多分は近世になつての改称であろうか。信州下水内郡のイタズイコなどは、ほぼその変化の過程を推測せしめる。これ以外になお同じ地方には次のような類例がある。

ヤマズイコ

信濃下水内郡等

ウマズイコ

同

同 更さら級しな郡

ボウズイコ

同

同 埴はに科しな郡

タカズイコ

同

同 北きた佐たさ久く郡

キズイコ

同上

オイランスイコ（スイコンボウ）

同

同 南みなみ佐さ久く郡

カラスツパ

同

同 北きた安あづ曇み郡

これ等はことごとく命名の趣旨が自分にはわかる。即ちタカズイコは高いから、ウマズイコは馬であつて、やや大形のものにはよく用いられる。オイランスイコもまた同じ意味で、虎杖は確かにスイコ中の上じょうろう 藪ろうである。それから山ズイコ、木ズイコ、棒ズイコは明白であるが、北安曇のカラスツパも同じく稗酸模で、

この種の特徴が長大にして幹を存する点にあるからであろう。これと近いものに福島県石城郡いわきのタケスカナ、福井県大野郡また山口県阿武郡あぶのタケスイバなどがある。いずれも竹のような酸模ということ、元はそれぞれ何とかいう名があつたろうと思うのに、こうしてよく似た動機に基いて、新らしい方言を造っているのである。

## 旧語保存

虎杖を信州更級などでウマズイコ、上総の望陀方面もうだでウシノスカツポというに対立して、自分の生地中部播磨では酸模をウシダ

ンジと称し、ダンジは即ち虎杖のことであつた。ダンジはまた隣の村々ではダイジともいつている。そうして僅かな野を越えて加東という郡に行けば、もうエツタンドリという語が行われているのであつた。私は『枕の草子』を読んでいわゆる雅語のイタドリであることを知つて後、頗る自分たちの方言を恥ずるの感があつたが、近頃比較を重ねて見ると、ダンジは即ちタチヒであつて、古いことに掛けては遥かに他を凌ぐものがあつたのである。どうしてこの一區劃くかくのみに、こういう古語が残っていたかはまだ謎であるが、山陰山陽は少なくとも三分の一、それから内海の幾つかの島と、対岸四国の一角までは確かに分布しており、更に不思議なことはその間を飛び飛びに、他の色々の方言の入り交いりまじつてい

のである。地図を染めて見る代りにやや細かくその实例を挙げて置くが、

ダンジ

播磨神崎郡以西

ダイジ

同 加西郡

ダイジンバ

丹後中郡

ダケダンジ

同 竹野郡

ダンジ

但馬一部

ダンジ

因幡岩美郡

ダンジ

美作英田郡

タチナ

備 中 北木島

タジンコ

備後 深安郡

タジナ（カンポン）

安芸賀茂郡 あきかも

タシツパ

伊予西条

タシツポ（ゴーザ）

同 おおふき 大保木

タジナ（ハアタナ）

同 ゆげ 弓削島

なおずつと懸<sup>か</sup>け離れて、伊勢の度<sup>わたらい</sup>会郡にもこれをタンバという土地がある。これ等の諸<sup>もろもろ</sup>の例の中でも、タジナなどはこれを転訛<sup>てんし</sup>ということさえ出来ぬ。野外で採取する食品をナと呼ぶことは、殊勝千万なる昔風であつて、とても近世人の思い付くべき名称でない。察するところこれ等の地方のみはむしろやや怠慢で、特にこの植物をもてはやして新名を案出しようとしなかつたために、古いものが偶然に保存せられたのである。

そんならこのタチヒの領域に介在して、現在異を立てている方はどうあるかというと、それにも二通りあつて必ずしも総てすべのものが、スカンポや竹スイコの如く、後に出来たとも認め難い。その中でも殊ことに自分が心をひかれるのは、次のような一系統の方言である。

サイジ

備前びぜん邑久おく郡

サイジンコ

美作とまた苦田郡

サジツポ

備中川上郡

サシツポ

同 小田・浅口郡

サジツポウ (イタドリ)

出雲いずも仁多にた郡

『俚言集覽りげんしゅうらん』

の増補に、伊勢でも虎杖をサシツポというたあ

るが、それはいずれの村であり、また今も存するか否かを知らぬ。自分の調査では下野しもつけ那須郡なすの伊川村などに、サジツポの例が飛んで存在する。それが必ずしも特殊の伝播でんぱでないことは、羽後由利郡の海岸でもサシボコ、それからなお東北一帯のサシドリがあって、むしろ分布は他のいずれよりも弘いのである。

美作・備中のサイジまたはサイジンボは、恐らくは隣境のダイジとの婚こんごう合であろうと思うが、これにも別になお一系統の尋ね得られるものがある。例えば

ハイタ

讃岐豊島さぬきてしま

ハイタ

伊予安居島あい

ハアタナ（タジナ）

同 弓削島

ハエタネ

同 はかた 伯方島

ハイタナ（イタズリ）

安芸倉橋島

サイタナ

周防大島

これがことごとく虎杖の土地称呼であるということ、比較をして見ぬ人には信じ難いことかも知れぬが、一たび古人の歌詠の中にも現れたるサイタツマという不思議な語を思い起すならば、それはむしろ語音が時と共に、いかに移り変つて行くかを示すべき好個の一例ということが出来る。サイタツマはあるいは単に若々しい春の草のことといい、また虎杖をいうとの口伝もあつた。例の『わくんのしおり和訓栞』の増補語林には、「先たつ妻」の義であろうなどと説いている。つまり古人も確かなことは知らず、ただその

言の葉の珍しさを興じたのである。そういう部分にはかえつて作り事が少ないかと思う。故に自分などは以前ある田舎に、虎杖をサイタヅマという例があつて、偶然にそれが京人に面白がられたとしても、少しも意外には考えぬのであるが、今の所ではまだ確かにそうであつたとも言われぬ。むしろこれから以後の新らしい調査によつて、逆にこの語のかつて存在したことを、推定する方が早路のようである。

サイタヅマは見た所複合の形で、かつその中にはイタドリの日々を含んでいる。しかし自分の想像では、果してこれが虎杖の方言なりとすれば、むしろタジナの方という語に、前と後とが附加したものだらうと考える。単なる凡<sup>きじよう</sup>上の論としては、本来長

かつた語が分解して、タジまたはイタを生じたものと言ひ得るであらうが、それでは私たちの切に求めている変化の理由というものがなお一層不明になる。その上に次に述べるような他の地方の實際ともいよいよ喰いちがうのである。

## 国の両端の方言

日本の中央部、全版図の約半分の虎杖方言はこれで一先<sup>ひとま</sup>ず分つたとして、他の半分を占める国の端々が、いかなる異同を示すかをこの次には考<sup>て</sup>えて見る。それが自分には言語成長の歴史を辿<sup>たど</sup>るべき、最初の手懸<sup>てが</sup>かりと信ぜられるからである。

この中でも九州の方面は比較的簡単で、稀まれにイタドリの浸潤を受けた以外、一二の異称の極めて限地的のものを交うるのみで、大体はサドという語を以て一貫もつしている。

カワタケ

ひぜんみなみたかき  
肥前南高来郡

パツパ

つしま  
対馬豊崎村

ギシギシ

とばた  
筑前戸畑

カワタケ

ぶんごひがしくにさき  
豊後東国東郡

サトガラ

はやみ  
同 速見郡

サド

ほと  
同 保戸島

サトガラ

くす  
同 玖珠郡

サド

しもましき  
肥後下益城郡

サドガラ

同 やつしろ 八代郡

サド

同 くま 球磨郡

サド

日 ひゆうが 向東西白杵郡

鹿児島県のみは現在ではイタドリで、サドという語が知られてお  
らぬ村が多いかと思う。サドガラのガラは恐らく稗であつて、こ  
の植物が成長してしまつて、茎になつて後の名であらうと思ふの  
は、北の方にもそれと同じような例があるからである。

ギシギシという名はまた紀州の有田郡ありだなどにも飛び離れて存在  
する。これは虎杖の齒に当る感覚で、あれを愛食する者のあどけ  
ない形容のようである。この地方の今一つの方言には、熊野から  
大和の十津川とつかわまで掛けて、ゴンパチというのがあつて系統が不明

である。吉野の北山でもゴンパチはイタズロと併存しているから、これもいたってかりそめ仮初なる流行に始まるものと見てよからうと思  
う。

それからずっと離れて東北の諸県であるが、こちらは九州のサ  
ドと対立して、サシという語を以て一貫している。例は多いから  
ただ要処だけを挙げて置くが、

サシトリ（スカツパ） 津軽

サシトリ（シカンコ） 下北佐井浜

サシトリ（スカンコ） 野のへじ辺地

サシドリ 南はちのへ部八戸

サシドリ 鹿かづの角郡

サシドロ

南秋田郡

サセドリ (トゴエ)

同郡 男鹿半島おが

サスドリ

羽後亀田

サスガラ

由利郡しねご笹子

サシボコ

同郡 金ノ浦こ うちら

サスドリ

同 田沢湖岸

サシドリ

同 雄勝郡おがち

シカドリ

同 飽海郡あくみ飛島

この最終のシカドリは、前に見えるシカンコ・スカンコと共に、もと酸いという点から出たことが想像せられる。そうすればサシドリもまたイタドリと同様に、サシとドリとの複合であつて、そ

のサシは下野の那須、伊勢の一部などのサジツポ、備後のサジナ（『本草啓蒙』による）と一つであるはもちろん、なお九州のサドとも関係があるのかも知れぬ。

次には南秋田の一部で聴いたトゴエである。土地では近頃北海道の方から、入って来た語のように思っている者もあるが、それは少なくとも半分の誤りである。半分というのは他の一方に、別にこんな語の存立を許す下地のあることを心付かぬからである。同じ東北でもやや手前の方に来ると、他に今一種の名詞がより多く用いられている。

ドンガラ（ドンガメ） 岩代大江郡

ドンゴイガラ 陸前柴田郡

ドンゴロ

越後岩船郡

ドンゴロ

同 粟生島あわ

トントングラ

信濃しなの下水内郡

『静岡県方言辞典』に、この県にもトトクサという区域があるというのは、事によるとこの系統かもしれぬ。北の方の境としては、羽後の横手町のドンガランボ、同仙せんぼく北郡横沢村でもドンガラである。ただし別になおサシドリがあつて、葉が出て後はサシドリといい、若いときをドンガラというと報告せられているが、同郡おおまがり大曲ではサシドリまたはサシボッコは若芽、そうでない場合がドンガラだという。いずれか一方が思いちがいで、恐らくは大曲の方が正しいのではないかと思つている。土地で確かめてもら

えば、わけもなく知れることである故、この点はかの地方の篤志家に一任する。

### 中間地帯の混合

右のドンガラのガラがもし茎のことならば、前半のドンはその意味は不明ながら、とにかくイタドリ・サシドリのドリと元一つで、かつてドリとのみいつて虎杖を意味した時代が、あつたらしいことを想像せしめる。しからば後に至つてイタといサシという語を、これに附加した動機もしくは原因は何であろうか。イタの方は現在においてはまだ何の端緒も得られぬが、他の一方のサ

シまたはサスはあるいは棒のことではなかつたらうか。この点に  
関しては他日更に細叙したいと思うが、棒は枋おこしとして肩に担ぐ風  
が盛んになる以前から、常人の生活には必要の多いものであつた  
が、これを表する古語は最早中央もはやの標準語には残っていない。そ  
うして東北地方のみにはサスという名があるのである。この虎杖  
の大きな特徴が、大竹に乏しい奥羽にあつて注意せられ、これを  
棒様のドリと呼ぶに至つたことは、竹ある方面でタケスカナ等の  
名が生じたのと、同じ事情と見ることが出来るようである。なお  
サスタケとサスマタとかいう語とも、考え合せて見るべきである。  
ボウという名詞とても、後に木偏へんに奉の字を付与したというの  
みで、まさか支那語の借用ではあるまいと思う。私の意見が正し

いならば、これはホコという語の分化であつた。ホコもハタホコなどといつて、本来刃ある武器に限られたものではない。関東一帯で小児等が弄ぶ小形の棒をボクトといい、従つて木刀という漢字を当てようとするものは、他の地方でベエタ、バイタなどというと同様ののもので、恐らくはまたこのホコから出ているのである。俗に独活うどの大木などという形ばかりいかめしくて弱いものを、栃木県あたりではイモガラボクトといつて嘲あざけつている。即ち芋茎のホコの如しという意味である。能登のとの石動山いするぎの麓ふもとの村では、虎杖をイタズリともいうがまたガラボコともいう。これから振りかえつて考えると、羽後飛島その他のサシボコも、命名の理由はいと明らかで、ただ一方いずれかを忘れて、趣旨が重複していると

うに過ぎぬことは、別に多くの例を挙げたナンバントウモロコシなども同じである。

こういうこんこう混淆が個々の方言領の境目に発生することは、單語の運命ともいふべきものであるが、自分の知る限かぎりにおいてはそういう入会地いりあいちは数多くあつて、いまだそれを重ね写しして一般的区劃くかくともいふべきものを、定めることが出来ぬのみである。

虎杖については自分の生国瀬戸内海の北岸なども一つの間地帯であつた。ダイジはイタドリと入交り、他の一方にはサシの系統かと思ふサイジンバ・サジナにも接して、なお新しいスカンポさえも併用せられる。他の一端では信州北部羽後の雄物川流域おもものなどにも、二系相剋そうこくの跡を留めている。太平洋側では陸中釜石かまいし

の附近がその一例であるが、山本鹿洲君の報告では、ササドリ及びアオバという他に、なおボーボーガラとデンボーガラとの二つが数えられた。ただしこのボーボーを直ちに今日の棒のことだと断定してしまうのはまだ早い。という理由は東北一帯には、山野にこの植物が盛んに繁茂し、小児がその若芽を生食する以外他に色々の利用法があるからである。津軽などではあの枯れた茎の中に住む虫を取って、魚釣の餌にもしているが、今一段と弘い用途は燃料である。囲炉裏いろりに親しみの薄い今日の人には、聴いても同感ことは起らぬかも知らぬが、燃料の種類殊ことにその燃え方によつて、名を付けた例は元は多かつた。馬酔木あしびをベリベリ柴と呼び、松まつか毬さをチチリという類は、始はじめは幼い者を喜ばせるためとしても、

今は既に親々の方言になつてゐる。故に虎杖のボーボーガラなども、同じく燃える姿からこんな名をなるほどという人が、次第に多くなつたのかも知れぬ。紀州の日高郡のある村ではホボロダケという名前もある。しかしそのために虎杖をホコといった前例と、全然没交渉とまでは言い切るに及ばぬ。玉蜀黍とうもろこしのマメキビを作つたように、甲あるがために乙の方言が殊に採用しやすかつたという場合は多いのである。福島県石川郡には、虎杖をテテポーポーという例があると報ぜられる。もしそれが誤解でないならば、やはり一方鳩の啼なき声こゑなどがあるために、少しく転訛してこんな名になつたのである。岩手秋田の田舎ではテテポーポは蒲公英たんぽぽのことであるが、これとても変化の過程は同じで、もし鼓の音のタ

ンポポや、鳩のテテポーポがなかったならば、蒲公英をこう呼ぶわけがないのである。同じ事情から鼓みづすまし虫まのマイマイコンゴウが、小児のキリキリマイの遊戯と名を一つにし、土筆のツクツクボウシは、寒蟬の啼声と共通の名を持っている。土筆は殊に少年の支配に服していたためか、こういう二つの原因を気軽に調合した例が至つて多い。そうしてその経路が虎杖よりはもつと明あきらかに、尋ねて行かれるように思われるのである。

### 複合形と語義

土筆を表示する日本の方言は、今日もまだ増加して行こうとし

ているが、主要なる系統は大略四つであつて、その發生の順序の明らかにし難いこともよく虎杖と似ている。相違はただこちらは全体に命名の必要が遅く始まつたと見えて、その趣意が大よそ察せられ、従うてその相互影響交雜の跡が、幾分か簡単に指示し得るといふ点にある。

先ず最初には標準語として承認せられているツクシであるが、これはやや古く文學語として用いられていたというのみで、現實の領分は決して廣大でない。東京などですら子供はツクシンボといい、京都近くでもツクツクシまたはツクツクと呼んでいる。こゝうなると既に複合形で、純なる元の姿でない故に、これから直接には語義を問ふことが出来ぬのである。ツクシは自分の推定では、

みおつくし  
濤標

のツクシであつて、突立つた柱を意味する。こんな微物に向つて、通例は重々しく考えられる標ひょうぼく木の名を転用したところ、もう最初からの軽い戯れがあると思う。関東以北においては特に設けられたる境の榜示ぼうじのみならず、天然の生木にもツクシの名を与え、更に進んではやや尖とがつたる山の峰の、特に目標となるものを大ツクシ小ツクシなどという例が多い。過大過小の差はあるが、転用という一事は土筆のツクシも同じである。

ツクツクまたはツクツクシに至つては、たとい「つくつくと立っている」という心持が加わつたにしても、前にツクシという語が先ず存在しなかつたらば、直接には発生する語ではなかつたと思う。それにもかかわらずこれとよく似た語の随分ずいぶんと弘く行わ

れているのには、単なる口拍子以上に、今一つ大切なる原因があつたからである。

ツクツクシ

摂津田辺町

ツクシ（ツク）

尾張西春日井郡

ツンツクシ

遠江浜名郡

ツクシ

同 森町

ツクツクシ（ツクシ）

佐渡外海府

ツクツクス

盛岡市

この通り多くの例は、いづれも殊ことさら更にツクの音を濁っている。

これは自分にとっては無意味な訛かびゆう謬とは思われぬ。即ち単に

「突つく衝く石」という以外に、更に第二の系統に属する「続つぐ」と

いう趣旨が添加していたからだと信ずる。多くの読者はあるいは自分の郷里ばかりの一些事さじなりと考えられるか知らぬが、小児が土筆を袴はかまの部分から二つに折って、そつと元の通りに挿さして置いて、どこで続いだかを中あてさせる遊戯は、古いと見えて殆ど全国に行われている。そのためには唄もありまた唱えごともあったので、ツクツクは即ちその常用の語として発育したらしいのである。この事を知るには今少しく精細なる比較が入用である。

ツクツク

津軽

ツクツク

陸中釜石

ツクツク

陸前けせんぬま気仙沼

ツギノコ

陸中平泉

ツギグサ

仙台附近

ツギナンボ

野州北部やしゅう

ツゲノコ

下総しもとう猿島郡

ツツンギノコ

上野こうずけ邑楽郡

ツギツギ

越後かしわざき柏崎辺

ドコドコ

同 西頸にしくびき城郡

モトモト

越中某地

ドコドコグサ

加賀のみ能美郡

ツギツギグサ

紀州なが那賀郡

ツギマツ

土佐

加賀では別にヘビノロウソク、もしくはろうそくぐさ蠟燭草という名があ

るのに、これをドコドコ草というのは、次のような童詞があるからである。

どこどこ継いだどこ続いだ

あたまの天井まで皆ついだ

越後の姫川流域のドコドコにも、

どこどこどこから続いだ

という言葉があり、紀州の有田郡でも

つぎつぎぐさどこ続いだ

というそうである。即ちツクシという語は由緒正しくとも、これ一つからツクツクという名は成長しなかった。誤りにもせよ確かなる根拠はあった。そうしてイズコ（何処）をドコというように

なつたのは近世だとすれば、その頃以前の世の小兒遊戯にも、なおその中間の同じ類の語があつたことが知れる。

### 語義の推移と感化

同じ「どこどこ続いだ」の遊戯も、土地によつて土筆即ち花茎<sup>かけい</sup>を以て<sup>もつ</sup>行うところもあれば、また杉菜<sup>すぎな</sup>即ち葉<sup>ようけい</sup>茎を以てするところもあつた。紀州有田郡のツギツギグサなどは杉菜であり、土佐でツギマツというものも杉菜を意味し、土筆はこれをつぎノコといへば杉菜の方が前らしい。常陸<sup>ひたちなか</sup>那珂郡の山村ではツギノコといへば杉菜を意味し、土筆はこれをつぎノコノハナと呼んでいる。

能登の鹿島郡かしまでスギナノトー、越中上新川郡ではスギナコート、コートはふき露などのとう臺のことだから、これも杉菜かきの方を主にしたのである。それから考えて行くと、杉菜はなるほど適切よなしかも佳い名ではあるが、似よった針葉樹も色々ある中に、特にスギという名が弘く行われたのは、やはりまた「継ぎ継ぎ」の遊戯が、この音を耳に親しからしめた結果ではなからうか。

その杉菜の方言を調べて見ると、土佐のツギマツという以外に、松にたとえたものも二三ある。例えば

マツナ

肥前みなみ南高来郡

マツナ

筑前

マツブキ

播磨

この二つは『本草啓蒙』に出ている。今も果してそういうかど  
うかを知らない。その他

スギナ

遠江竜川村

シギナ

越後粟生島

スイナ

陸中種<sup>たねいち</sup>市

スギグサ

陸前田代島

ツギグサ

岩代伊達郡

ツギナ

新潟県一部

などが皆杉菜の方言である。越後には草をツギナ、花茎をツギツ  
ギという土地があるのではななかろうか。尋ねて確<sup>たしか</sup>めて見たいもの  
と  
思  
っ  
て  
い  
る。

とにかく特にツギナという語の発生しやすかつた事情はあるので、仮に杉菜という方言が独立に始まったとしても、これもツギギがツクシと連携したように、久しからずして二種の趣旨を混同することになったかと思う。久しく実地を省みなかつた人たちには、あるいは信じにくい話であるかも知らぬが、同様の例は弘く搜索するまでもなく、土筆一つについてもなおたやすく次のものを挙げる事が出来る。たとえば私の郷里の播磨神崎郡では、杉菜をオスギといい、土筆をホウシといい、そうして次のような童詞があつた。

お杉だれの子、ほうしの子

ほうしだれの子、お杉の子

なるほど天然の小觀察者に取つては、この兩人の關係は竹と筍たけのことの間柄よりも更に神秘であつた。それ故にこそ卵にわとりと雞との昔話、ないしはナルシツソスの神話にも比ぶべきこんな謎の歌を、いつの頃からともなく春來るごとに、野に出でて唱えていたのである。しこうしてお杉には杉菜、繼菜という元の形があつたと同じく、ホウシもまた必ずしもお杉の後に生れるものでなかつた。あのすつぱりとしたやや尖つた頭に、何枚かの衣をぬくぬくと著きて出る姿は、お杉がいなくともなお法師であつた。日本には僧侶の總稱をホウシという俗用の他に、どこか形のこれと似て一かさ小さい者を、転用によつてホウシといつた時代があつた。『狂言記』ではカナホウシが幼児の名ときまっていたのみならず、吉法師だの

三法師だのという童名はあの頃は珍しくなかつた。

さてそのホウシを土筆に付与したのは、果して本来の僧侶の意味でか、あるいはまた子供という心持で命名したのかは問題であるが、いずれにしても後には双方に通わしていたことは、前に挙げた童詞が明白にこれを立証する。即ちこれもまた名が定まつて心が更に改まつた例である。ホウシという方言の区域は相応に弘い。

ホウシコ

播磨<sup>しそ</sup>宍粟郡

ホウシ

美作<sup>くめ</sup>久米郡等

ホウシ

備中<sup>じょうぼう</sup>上房郡等

ホウシ

但馬

ホウシ

鳥取県約一円

ホウシサン

出雲美保関 みほのせき

ホシサン、ホーシ

同 松江市

ホシコ

石見太田町

ホウシ

備後深安 ふかやす・沼隈 ぬまくま

ホウシ

安芸賀茂郡

ホウシコ

同 大崎下島

ホウシヤヨミノコ

同 倉橋島

ホウシヤ

周防大島群島

ホウシコ

讃岐高松その他

ホウシコ

伊予松山・西条等

この中で安芸の倉橋島のホウシヤヨミノコは、お杉と関係なしに同種の唄のあつた証拠であり、周防大島のホウシヤもまたその痕跡と認められる。ホウシコというのも恐らくは土筆を幼童に譬たとえた例と思うが、なお自分としてはこの方言の起りは狂言のカナホウシ時代よりも古く、やはり本物の法師と似た所から、直接に持つて来た語であろうと思う。その証拠としてよいのは、同じ系統に属する次のような方言である。

ゴボウ

上総望陀地方  
もうだ

ホトケンボウ

常陸稲敷郡  
いなしき

ボウズ

加賀河北郡  
かほく

デンボウシ

備前下津井  
しもついで

ヒガンボウス

安芸佐伯郡さえき

ヒガンボウス

周防玖珂郡くが

ヒガンボウ

石見大森

ヒガンボウス

同 那賀・鹿足郡なか  
かのあし

ヒガンボウス

長門阿武郡ながとあぶ

ヒガンボ

伊予喜多郡

ヒガンボシ

同 北宇和郡九島

ヒガンボウス

土佐幡多郡はた

ヒガンムウス

同 安芸郡

ヒガンボウス

豊前一部ぶぜん

ヒガンボウス

肥後阿蘇小国あそおぐに

ヒガンボイボイ

日向宮崎郡

即ち飛び離れた東国の例は別にして、ホウシ区域は西隣では一様に、春の彼岸にもてはやされる法師になぞらえて、随分と氣の利いた可笑味おかしみのある方言を採用しているのである。この中でも石見の浜田方面には、

彼岸坊主は誰の子

すぎなのかかあのおとむすこ

という童詞があつて、言葉は変わつても心持だけは、こんな遠くまでも走り廻っているのである。

## 隔地共通の例

ここまで進んで来ると、東京附近や信州などのツクシンボが、二つの方言の複合であることは、最早もはや討論を要せぬと思う。しかもその例は決してある小地域に限られておらず、これも西は九州の端々と、東は奥州の各地とに、看過すべからざる共通を見出すのである。

ツクボ

筑前戸畑とばた辺

ツクボウ

筑後三潴みずま郡

ツクボンサン

同 柳やながわ河

ツクボウ

佐賀県一部

ツクボウ

対馬つつ豆つ酸

ツクボウ 豊後日田郡ひた

ツクボウシ 肥後鹿本郡かもと

ツキボシ 同 玉名・宇土等たまな うと

ツクボシ 同 下益城郡

これと最もよく似た例は先ず中部日本において見出される

ツクボ 美濃養老郡みの ようろう

ツクボウ 同 根尾谷

ツキボ 越前大野郡

ツクンボ、ツクボシ 三河額田郡ぬかた

ツクンボウシ 同 宝飯郡ほい

ツクンボ 遠江袋井その他

ツクボウシ

信濃下伊那郡

ツクンボシ

同 諏訪郡

即ち何でもない差別のようだが、ボウまたはホウシという語の、附加したものにも劃かく然ぜんたる領域があつて、互いに入交つてはおらぬのを見ると、土筆を見て法師の姿を聯れん想そうする習わしは、少なくとも近畿その他のツクシ・ツクツク区域等には、行われていなかったと同時に、ツクシンボというが如き単なる一音節の添加にも、なおそれ相應の意識のあつたことは認められる。前田林外君の『民謡全集続篇』に、東京府下の子供唄として、次のような一つが挙げてある。

つくしんぼうやどうしんぼう

彼岸の入りには袴はいて出やれ

即ちヒガンボウズという方言の領分から、これだけ隔絶した東国の果はてにおいてさえも、小児はなお土筆を坊主として待遇することを忘れなかつたのである。

忘れなかつたということとは、当然に「いつ覚えたか」及び「どうして学んだか」の問題を連れて来る。春の彼岸の頃に里に現れるツクツクボウシと、夏もやや終おわりに傾いてから庭の樹に来て啼く蝉の声とを、一つの言葉で呼ぶということは、驚くべき無頓著むとんちやくには相違ないが、とにかくに誤解と称すべきものではない。二つの地方語の間には明らかに関係があり、しかもいずれか一方が正しく他方はこれを濫用したのではないばかりか、むしろ相手がな

かつたら双方とも、こういう変化は見なかつたかも知れぬのである。土筆のツクツクホウシは既に九州に始まり、北は奥州の一端に及んで、その隣のツクボウと聯絡れんらくを保っている。

ツクツクボウズ

豊前宇佐郡

ツクツクホウシ

大和一部

ツクツクホウシ

紀伊有田郡

ツクツクボウ

同 南牟婁郡  
みなみむろ

ツクツクボウシ

伊勢山田等

ツクツクボウシ

近江八幡等  
おうみはちまん

チュクチュクボン

同 仰木村  
おうぎ

チクチクボウズ

飛騨吉城郡  
よしぎ

ツクツンボ

能登珠洲郡すず

ツキツツボ

越後一部

ヅヅボウシ

静岡県一部

ツウツンボ

あわちとせ安房千歳村

ツクツクボウ

いわきいわき磐城石城郡

即ちツクツクまたはツギツギという在来の語に、坊主の擬人観を添えれば直すぐに出来る方言で、これだけ見ると蟬の声は比較的  
自由だから、小児がこれを聴いて春の土筆の名を貸したとも考え  
られるが、実際は寒蟬のツクツクホウシは五百年前の文学に現れ、  
今日も標準語として認められているのみならず、昔からほぼこれ  
に近い啼声をするものとなっていたのである。こんなついででも

ないとその記録も遺し得られぬから、退屈しの凌しのぎにその例を並べて見ると、古い所では『蜻蛉日記』にクツクツボウシ、『散木さんぼく奇譚集きかしゆう』にはウツクシヨシと鳴くとある。近世の口碑こうひにおいては筑紫つくしの人旅に死し、その靈化して蟬となつてツクシコイシと啼くと、也有やゆうの「百虫賦ひやくちゆうふ」にはあるそうなる。その筑紫方面の聴き様もそれと近く、いずれも寒蟬を

ツクツクホウシ

肥前一部

ツクツクツシヨウ

同上

ツクツシヨウ

肥後各郡

ツクンビヨウシ

近江神崎郡

チユクチユクオイシ

同 仰木村

ツクツクシ

加賀金沢

ツクツクエンヨウス

越後一部

カタカタキンヨウス

同上

コチヨコチヨキーヨウス

同

にしかんぼら  
西蒲原

ツクツクヨウス

仙台

ツクンヨン

下野河内郡

ゴトゴトゴイシ

常陸稲敷郡

キタカタゴンズ

下総北相馬郡  
きたそうま

ホウセンツクツク

上総夷隅郡  
いすみ

ホウエンツクツク

同

ちようせい  
長生郡等

などといっている。自分も少年の日に下総北相馬郡にいて、右の

キタカタゴonzを聴いた。何か隣の北方という村に、むかしごんす権助けとでもいう男がいたのではないかと思つていた。最後のホウエンツクツクも法師のことであろうから、とにかくに坊主の聯想は蟬んなみのツクツクの方にも、早くからあつたのである。播ばんしゅう州印南郡の土筆採りの童詞として、郡誌には次のような唄が載せてある。

つくつく法師出やらんか

親はないか子はないか

たった一人の娘の子

なごどに取られて泣きなさる……

これは手てまりうた毬唄などになつて今も諸国に弘く行わるるもので、

本来は雉子きじの歌であつた。

山のけんけんきじ雉や何を泣くね

親がないか子がなにか

親もあるが子もあるが

たつた一人の男の子

鷹たかじょう匠じょうに捕られてきよう七日

七日と思うたら十五日……

というのであつたが、土地によつてはげんげの花といい、更に転じては「つくつくぼんさん何泣くね」とも歌っていた。それが寒蟬の哀話からまた移つて、土筆を見つける際の呪文のようにまですなつたのである。これを要するに多くの言語は、興味ばがこれを培

いよう  
 養して次々に今の形まで成長せしめたので、その久しい前後の  
 伝記を切離きりはなし、単なる一時代の横断面のみを以てもつ、その本質を  
 説こうとするは心得違いなことでなければならぬ。

## 方言区域の論

またまた話が長くなったから、もう一隅の残った部分だけを記述して、自分の結論に急ぎたいと思う。東北地方の土筆も太平洋側の半面には、前に引例した如くごと自分のいう第一第二の系統、即ちツクシとツギツギとの交錯とどに止まっているらしいが、他の半面の日本海側にはまたやや異様なる変化が認められる。

ツクベ

秋田市

ツクベ (ボウズ)

南秋田郡

チツクビ

仙せんぼく北郡横沢

ヅツクベ

同 大曲等

ヅクンベ

河辺郡

チクベ

由利郡亀田町

ヅクベ

同 笹じねご子村

グウツベ

飽あくみ海郡本もとたて楯村

山形県下は大体にほぼ中央部と一致している。さてこのツクベが単なるツクボウの音訛であるか、はたまた新種の協定にして、更に第五の系統を暗示するものであるかは、容易には決し兼ねる。

そういう理由は今までに列挙した以外に、なお幾つかの興味ある新称呼が、殊ことにこの方面に多くかつ成長しつつあるからである。讃岐や豊後の一角に存在するタウナまたはトウナ、越中高岡辺のヅンベラコウの如き異例は除き、他のやや普遍的なる方言は一つには筆にたとえたもの、

フデクサ（ツクツク） 大和十津川

フデバナ 信濃北佐久

キツネノフデ 越後東蒲原

フデノホコ 奥州野辺のへ地

二つにはろうそく蠟燭にたとえたもの、

ヘビノロウソク 加賀の能美郡

キツネロウソク

能登鹿島郡

キツネノロウソク

越中にゆうぜん入善

筆も蠟燭も田舎に知られたのは古いことでないから、この名を使い始めた人々は恐らくは在来のものを見棄てたのである。第二種は少しばかり説明に困るが、先まず次のようなものである。

イノノチンボ

信州一部

ネコノチョンボ

越後三川村など

ンマノスツコ

羽後由利郡

ダンベコ

北秋田こあに小阿仁

ツツコ

鹿角郡

チコババ

津軽こどもり小泊

## ヂヂババ

下北佐井浜

ヂヂババは通例男女というまでの意味で、これも以前には田舎の子供たちが、無邪気な笑わらいの料に用いたことがあった。ツクベの起りは仮に継ぎ継ぎであつても、あるいは童詞などの関係から、特に下品な音を添える必要があつたかも知れぬのである。

私は地方語變化の主要なる原因として、個々の客体の社会上の地位、即ち人との關係を算かぞうべきことを信じているが、それはもちろんその物の重要さを意味するのでない。むしろ正反對に生活の交渉がやや浅く、軽い利害を以て表現の不一致を眺めることのある場合に、たとえ隱語の如くわざわざの相異を企てぬまでも、自然に形が改まつて若干の不審を招き、解釈に僅わずかずつの智力を

要することを辛抱しんぼうしましたまたは歓迎したかと思つてゐる。そういう  
余裕の多い者が何人なんびとであるかはわかつてゐる。無造作率直と少  
しも苦しめない技巧とは、特に少年たちの参与に基づいて、方言  
の一つの特色となつたのである。ただし新渡の農作物、もしくは  
山野の採取物においても、時の経過と共に遠方への商品となつた  
り、またある期間の前後を考えられることになる、用語はその  
ように浮気であつてはならぬ。故ゆえに追々おいおいに各地に固定するのみ  
ならず、また力つとめて大勢に迎げいこう合せんとするのである。別の言葉  
でいえば方言の分布には、その本然の約束といふべきものよりも、  
かえつて社会的原因が多く働いてゐるわけで、従つて特殊性に富  
みたる民族の経歴ほかを外ほかにして、いつの時代にも言語の類似から、

大古の親類關係が考えられると思うのは誤謬<sup>ごびゆう</sup>である。

いわゆる方言区域は本篇のような調査を重ねて行くうちには、結局は何人も争い得ざるものが劃<sup>かく</sup>定<sup>てい</sup>せられることと思うが、それは要するに昭和三年以後の方言区域であつて、百年五百年前の異なる文化の下に、同じ分野が現れていたという証拠は、また別に求めなければならぬのである。人は往々にして大体といい僅かなる例外といわんと欲するが、いかに小さな例外でも原因はあるべきで、その原因は即ち過去の異なつたる交錯にあり、むしろある時代の方言区域の、今とは大に異なつていたことを示すものかも知れぬのである。

そうすると時代時代の輪ちがいになつた方言区域を、骨折つて

跡付けることも張合いのない話のようであるが、四隣しりんの異同を詳しく究めた上でないと、地方的変化の法則を知ることが出来ず、地方と時とがどれだけの影響を与えるかを測量しないでは、言語の成長を説く方法がないのである。その上に各時代を貫通した傾向の如きものは必ず分つて来る。例えば距離が変化を顕著にすることなどは、仮にまだ理論の満足にこれを説明し得るものがなくとも、次第に実験を積み重ねうたがひる疑の余地がなくなるはずである。ただこれに関かん聯れんして自分の考えて見たいと思つてゐるのは、言語には發生の大小の中心地があつて、右の距離は是非ぜひともその中心から測るべきものではないかということである。東北と九州とは互いの距離は最も大きいが、単語の近似は決してここに挙げた

虎杖や土筆のみでない。これも昔の京都とその周囲の地とが、一つの強力なる中心地であつたためではないかということである。故にもし果して言語の伝播にも、周圈波動の法則が存立し得うるとするならば、少なくとも一本の堺線を以て、国を南北に二分するの案は危険である。

## 董の方言など

## 一

諸君<sup>しゅうくん</sup>蒐<sup>しゅう</sup>集<sup>しゅう</sup>の民謡はいつも大なる興味を以<sup>も</sup>つて拝見して  
ますが、その中には今はもう歌わないもの、ある老人が僅<sup>わず</sup>かに記憶  
していたもの、意味の不明で誤写だろうかと思うものなどがあつ  
て、地上楽園も時としては枯野をあるくような感じがします。

無理もないことながら、この半世紀の間に、非常に多くの歌が亡びたようであります。それでも以前は忘れた人と、新たに歌い出す人が同じであつたために、知らず識らずの間に心持を相續していたような痕跡こんせきがありますが、これから亡びるものは永久に、また根こそげなくなるのです。そうかと言つて人為を以て保存するのはつまりません。ただじつと看みているの他はないと思ひます。

以前の日本は歌に満ちたる国であつたようです。中世の終頃おわりから、それが四句二十六字の小唄に統一せられ、夙はやくその大部分を喪失したことは、一方には保存せられる民謡の言葉が存外に新しいことにより、他の一方には神社の祭式の中に少し残り、もし

くは童女のてまりうた手毬歌などに、散乱して伝わっている古いあや言葉から、推測し得られるのであります。

児童の前代生活を保存してくれた功労は没すべからざるものがあります。今では殻ばかりになった村々のこうひ口碑の類が、かつては美しい辞句と旋律とを以て彩色せられ、深い感動を傾聴者に与えていたらしいことは、たとえ無意識の片言まじりにもせよ、子供が繰返してしてくれた色々の歌から、僅かに認めることが出来るのであります。

私は昨年あたりから、人の笑うようなご苦勞な方法を尽して、この方面から文学のなかつた時代の文芸を尋ねて見ようとしております。その間に新たに得た經驗は、新奇を好む点では何なんびと人よ

りも熱心な子供たちが、実は意外な保守党であつたということでありました。

その理由は考えて見れば何でもないので。「おつむてん」などの簡単な遊戯から、「子買お子買お」の如きごとこ込こみいい入つた演劇に至るまで、一つの行事に一人の児童の携わるのは、精せい々ぜい一年か二年であります。前の子供にはもう珍しくなくとも次の子供には新奇です。一生懸命になつて模倣をして、ほどなくこれを弟妹に引継ぐので、彼等はいつまでも留學生の如き感受性を以て、古い古臭い遊戯を学ぶのであります。そうしてまた教える側でも、特に計画ある幼稚園でもない限り、いつも手近い仕来りしきたをそのまま利用しますから、偶然に一種の馱伝競走の如く、大昔との聯絡れんらく

を見るのであります。

## 二

それから今一つ、平穩無事なる村の生活に老いて行く人々は、子が生れると再び子の心に復かえり、孫が出来ると自分が孫であつた頃の、感覚を喚よび起されるのであります。殊ことに子供の相手は年としよ寄りときまっています、その間にはまた大きな鏈くさりが繋つながって行くのであります。

この意味からして私は、童児の持つている日本語を珍重します。農夫の骨折な日々の生活では、とても静かに観察している余裕も

ない天然の事物を、門に立つて老人と幼い者とが、いつまでも噂したのであります。子供が学ぶ新しい物の名は、大抵は祖父が小さい時に教えられて、そのまま蔵しまつて置いた古い智識でした。特に小学読本の如く子供のために編纂へんさんしたものではありません。またそんな訂正をする必要は、今までは少しもありませんでした。現在の少年はこれに反して、恐らく孫を見るまでには、一切の幼い時に得たものを、改革してしまっているでしょう。

十年ほど前に紀州のある教師が、児童の持つている童話を蒐集して見たことがあります。それを見ていると半分は土地の昔話、残り半分は巖谷いわや小波君、久留島武彦くるしまたけひこ君などの本から読んだものの不精確なる記憶でありました。即ち是非すなわぜとも確實なる話をし

なければならぬとも、思っていない若いおばあさんやおっかさんは、胸に浮んで来る順序に、知っているだけの話をしたので、いわゆる教育が伝統の敵であることは、最も顕著にこういう善でも悪でもないものの上に現れるのであります。

しかも今日はもう歴史を学ばんとする者が、既に資料の欠乏に苦しみ始めているのであります。例えば還<sup>かえ</sup>つて村の老翁の一人に聞くならば、何でもなく説明してくれるような事柄のために、図書館中を駆けずりまわるのであります。外国の参考書は料理がしてあるが、日本の資料はなまである。時としては自ら出て行って採取しなければならぬのに、問うすべも知らず、いわんや快く語らせるだけの親しさを持ちませんでした。今に大いに不自由を感じ

ずるに違いないと思つています。

ところが我々の友人の中には、別にこれという入用はなくして、単にあつた物のなくなるのを愛惜するという情だけから、何となく手帳をつけているような人がかなりあります。個々の家庭に必ずある年寄と子供が、朝から晩までれんらく聯絡を保つていても、消えるものはやはり消えてしまいました。それに比べると遥はるかに無力なるこんな記録が、果はたして落ち散つた鏈を再び繋ぎ合せることになるかどうか。随ずいぶん分心細い話ではありますが、幸いにして古人の聊いささかも味い得あじわなかつた幸福が一つあります。即ち一時に全国の隅々にあるものを、比べて考えて見るといふ便宜であります。

民謡なども諸君のような企てによつて、今いまさら更何事をか語ろう

とじているのであります。私は日本の民間文芸の最後の伝承者、即ち既に老いまたは老いんとする昔の児童をして、今一度相会してかつて感受したものを説かしめたいと思うのであります。そうして単なる冷かな批判者としてではなく、出来るならば少しでも感激の相槌あいづちを以て、彼等に力附けたいとも思うのであります。

## 三

そこで差さ当あたって自分が分担している方面、即ち物の名の附け方と小児の生活、それから歌というものがどういう風にして口ずさまれるかなどの問題を、雑然としてお話して見ようかと思いま

す。涼しい樹の蔭などがあるならば、立ち止まって暫しばらくこの顧みられなかつた旧事を考えて見て下さい。

私は董すみれという草の地方の名称を比べて見ました。この植物の命名法は、全国を通じて先まず三種類に分れております。それは最初から三通りあつたわけではなく、多分ある年代を隔てて順次に出たのが、採用されたりされなかつたり、したものだと思ひます。その中で一番古いのはもちろんスミレでありましようが、古いだけにどうしてそう名づけられたかわかりません。しかし今に知れることと思つています。

第二にはあの紫の花の形を、駒こまの顔に見立てた命名であります。この微小なる花に、あの大きな馬の顔をもつて来て比べることは、

小児の想像力でなければ出来ぬことです。『本草啓蒙』に採集してあるのは、

トノウマ

薩摩

コマヒキグサ

筑後

キヨウノウマトトノウマ

筑前

などですが、今もそう言うかどうかわかりません。

近頃になって知ったのは、

ウシンコツコ、ウンマンコツコ

薩摩

チンチノコマ

駿河すんどう駿東郡

ベコノツノツキ

羽後秋田郡

などです。ベコとは牛のこと、チンチは何のことか知りません。

ウシンコッコのコッコもまだ分りませんが、とにかくこれだけの方言からでも、二つの花を持つて闘わせていたことが想像せられます。トトノウマなども「殿の馬」で、京の馬と二つを對抗せしめたものかと思ひます。

第三種の命名法は即ち角力<sup>すもうとりぐさ</sup>取草の系統であります。

カゲピコ

秋田市

カギヒツパリ

羽後<sup>せんぼく</sup>仙北郡

カゲヒキ

陸前<sup>とめ</sup>登米郡

カギトリバナ

仙台

カギヒキバナ

同上

アゴカキバナ

越後

ヒツカケ

同 西蒲原

カギバナ

讃岐・伊予

カギというのは疑うたがいもなくこの花の馬のあごたどに譬たとえられた部分で、現に私たちもこれを引掛け合つて、首のむしれた方を負まけとして角力を取らせたものであります。

角力取草という名は車おおばこ前まへその他色々の草に付与せられていますが、董をそう呼ぶ地方が一番に広い。京大阪を中心として、北陸関東から磐城いわきの一部まで、西南は中国四国にも及んでいます。即ちどうして学んだかこの遊戯が、これだけの間に行われていたのであります。関東の方では大抵スモウトリバナというのは、恐らくは別になお相撲を取らせる草もあつたからでしょう。

## 四

次に珍めずらしい董の異名は、三河の宝飯ほい郡などでタロンボージロ  
ンボーというので、これは俳人等が早くから注意して、太郎坊次  
郎坊と歳時記類にも出ているそうです。同じ例は近国に多く、

ジロウタロウ

志摩磯郡

ジロヤサブロウ

伊勢相可おうか

ジロウタロウ

美濃恵那えな郡

美濃なえぎの苗木などでは普通にはスモトリバナで、白花の董をジロ  
バナ、これに対して紫色のをタロバナと呼んでいます。即ち董に

相撲を取らせる場合に、一方を次郎、他の一方を太郎と呼んでいた名残で、『狂言記』の八幡はちまんだいみよう大名などを聯想れんそうせずにはいられません。

董をこの遊戯に使用したのは、多分はこれ等の名前よりも更さらに前からでしょう。今一種の異名の、

オソメバナ

信州しもみのち下水内

オソメンバナ

越後なかうおぬま中魚沼

の如きは、今はまだ名の起りが想像しにくいが、

ジンジイバンバア

遠州竜川村

に至つては、たしかに二つの花を掛合せた痕跡があります。爺と婆とは普通には春しゅんらん蘭の花を採つてそう呼びました。元は粗野

なる歌があつたに相違ありません。甲州の逸見<sup>へみ</sup>では、蝸牛<sup>かぎゆう</sup>をも  
ジットーバツトーと呼んでいます。

最後に今一つ、熊本県の人<sup>ひとよし</sup>吉附近で、董をセセンブキブキと  
いうのも歌に依<sup>よ</sup>つた名でした。その意味ははつきりしませんが、  
角力とは関係なく、二つの馬を闘わしめたのではなからうかと思  
っています。この唄の文句を記憶する方の教示を受けたいのです。

# 草の名と子供

## 緒言

小さな自然に名を与える事業には、児童が誰よりも多くの興味を以て働もついている。その言葉が成人にも承認せられて永く行われ、一方にはまた同じ子供のような気持を以て、新たに言い始めた物の名も多かつたことは、方言を集めていると容易に心づくはずで

ある。この頃ごろ外国から持込んだ色々の新語と並べて見て、殆ほとんと両極端と言つてもよい態度のちがいは、やがてまた近世の国語の歴史の、看過すべからざる変革を暗示するものかと思う。私が目下分類に着手している『児童語彙ごい』には、明白に児童しか使わぬというものだけを載せることにしているから、十分な証明をすることが出来ない。それで別に全体にわたつて物の名の話をして見ようと思う。寒中に草の話をするのも時を得ないが、なるだけ因縁のあるように第一には「雪の下」、次には卵うの年だから兎うさぎの何々という類の草の名を問題にする。そうして徐おもむろに春の我々に来るのを待とうと思う。

## 雪の下

私たちの在所では、よくこの草の葉を揚げものにして食べた。子供の頃の事を思うと、先<sup>ま</sup>ず最初に眼に浮ぶ冬の草である。寒い盛りにも紅味を帯びた緑の葉が見られて、「雪の下」という名も似つかわしいようだが、雪に覆われたところを見た記憶はない。東京へ来てからは庭にも植えて見たが、通例は石がけ、殊<sup>こと</sup>に井戸の内側などの清いところに、自然に成長して春早く花が咲くので、花の形は白い小さな蝶の羽に似てずっと長めであった。雪の下という名も知ってはいたが、子供や女は皆ユツグサといっていた。ユツは播<sup>ばん</sup>州<sup>しゅう</sup>などでは井戸のことである。他ではまだ同じ名は

耳にしないが、紀州の有田郡、飛驒ひだの高山や船津ふなつ、東北では伊達だて郡の掛田かけだなどでこれをイドグサと呼んでいる。富山県の射水郡いみずではイケバタまたはイケノハタという。このイケも池ではなく、あの辺の方言で井戸のことである。大阪府の泉せんぼく北地方でイトバスというのも、多分は井戸かと思うが、バスの方は明あきらかでない。岩手県の九戸郡くのへではエシガラミ、即ち石すなわにからんで生える草の意であらう。

「雪の下」の漢名は虎耳草こじそうだという。なるほど毛がはえて紫がかつた形が獣の耳を思わせるが、虎にしては少し小さ過ぎる。越後でこれをヒゲジサという郡もある。全体に剃そりおくれた鬚ひげほどの毛があるのでそういったという。子供の疳かんの薬、また心臓の病に

もきくといっている。宇都宮附近ではミミダレグサ、磐城相馬郡いわきそうまではカンカチグサという。カンカチはこの辺では火傷やけどのことで、それに附けると治る故ゆえにそういった。耳だれも恐らく同じ理由であらうが、どうしてもしてそのような試みをしたかというところ、やはり葉の形が耳に似ているからの思い付きと考えられる。紀州の熊野ではカミナリグサ、あるいは弁慶草べんけいそうのことだという土地もあるが（有田）、これを栽うえて置くと雷が落ちぬといっている。雷はめつたに落ちるものでないから、この経験はそう当てにならない。

『豊後方言集』ぶんごにはこの地方の名称が幾つも挙げられている。その中でキジンソウというのは名の起りが最も不明だが、九州でも筑後の久留米くるめ、肥前五島ひごとうの久賀島ひさかでそういい、更に東北さくらでは仙台

から石の巻に及び、秋田県の横手もキンズンソウというから、もとは中央の名であつたかも知れない。五島ではこの草のしぼり汁を小こさかずき盃さきに一杯ずつ、一日に三度飲めば熱さましになるともいつている。豊後にはまたこの草をキンギンソウという方言がある。葉に白赤の光があつて、めでたい草であるから金銀草といった方が、キジンソウよりは前かとも考えられる。あるいはまたユキバナという名も同じ地方にあり、また雪割り草という者があり、愛媛県の周しゅうそう桑そう郡ではユキヤケグスリともいつている。雪のまだあるうちに花が咲き出すから、雪の下と呼ぶに至つたのも理由があると言えるが、なお私などはこのユキもイケ、即ち井戸のことではなかつたかと思つている。これくらいの意味変化は方言には

珍らしくない。そうしても一旦耳に馴れた古い語形は棄ててしまわぬのである。

## 兎の耳

兎という名の草は方言に幾つかある。たとえば山口県の柳井やないでは薊あざみをウサギグサ。これは福島県の相馬地方そうまでも、野薊を馬の牡ぼ丹餅たもちというから、多分は兎が悦よろこんで食べる草という意であろう。越後の刈羽郡かりわで車前おおほこをウサギグサというのも、やはりこの草を飼料とするからかと思う。車前は殊に小児と親しみの深い草で、この茎を引掛け合う遊びがあり、相撲取り草の名をこれに付与すもうとし

た地方も多く、あるいはカエルグサ・ゲエロッパともいって、蛙をひどい目に遭わせて置いてから、この葉を掛けて置くいと活きかえるなどともいっていた。またこの葉をよく揉もんで糸のさきに結わえ、田の中を持ちあるいて蛙を釣る遊びなどは、あんまり面白いので親になってからも、私はこれを試みて子どもに見せたことがある。他の草でも釣れるのかも知れぬが、我々は車前でなくてはならぬように思っていた。上手に竿さおをはねると二丈三丈の青空まで、蛙が飛び上って遠くの田へ落ちることがある。今考えると蛙こそよい迷惑であつた。

それから今一つ、静岡県の各郡ねずみで鼠の耳、もしくは兎の耳と呼んでゐる草がある。本名は母子草ははこぐさ、私の郷里などではホウコ、

好い香がするから芳香であろうと、少年の頃には思っていた。漢名は鼠麴草そぎくそそうまたは鼠草、色も形も大きさも短い毛のある容子ようすも、鼠の耳になれば似ていると言える。従ってどうして兎の耳にたとえたかは疑問であるが、あるいはまた奈良県北部のように猫の耳と呼んでいる地方もあるのである。この草にも色々の異名があつて、我々にとつてはなつかしい記念である。これを鼠の耳というのは佐渡の国くに仲地方、他にもまだあろうと思う。阿波の祖谷山あわ いややまではホウベラ、春の七草の一つのハコベラが、この草であつたことが想像せられる。三河の宝飯郡ほいでトゴゴというのだけはまだ説明が出来ぬが、千葉県印旛郡いんぱでコウジバナといっているのは、葉の色花の形が麴こうじに似ていたからで、昔の麴は今のようになつた

たものでなかつたのだらうと思う。山口県の厚狭郡ではハハコグサをテンジクモチ、これを餅もちに入れて搗ついたものも天竺餅てんじくというそうである。以前は餅草即ち艾よもぎ以外に、この草を餅に入れるのは普通であり、またこの方が色も佳よく、においも高いといつたものであつたが、関東の人たちはそれを知らず、西でも追々おいおいに用いる者がなくなつた。あるいは発生が少なくなつたようにいう人もあるが、私はまだ確たしかめて見ない。四月八日のお釈迦しゃかの誕生の日に、紫雲英げんげと薊げとこの花とを以て、花御堂はなみどうの屋根を葺ふく習なわしもあつたから、天竺餅の名はそれから出たのかも知れぬ。豊前ぶぜんの宇佐地方ではこの草をネバリブツ、フツは餅草即ちヨモギのことだから、それに比べると粘りが多いか、または葉の表面が真綿ねぼしの

ようなもので覆われているという意味であろう。広島県安芸郡あきでこの草をオトノサンヨモギ、また淡路島の一部でトノサマユムギという理由はわからぬが、これも私などの推測では、餅にはハハコグサを入れる方が古く、今の餅草に改まったのは後のことで、それで本式の草餅を作る草の意味に、こういう名を設けたのかと思う。オトノサンは少なくとも百姓に対立した語であつた。

## 馬の砂糖

秋田県の北部では、杉菜を馬の砂糖という。馬が非常にうまがつて食べるからの名らしく、すなわち小児等が砂糖にあり付くよ

うになつた頃の新語で、今ならば馬のキヤラメルとでもいう所であらう。富士山の南麓<sup>なんろく</sup>地方には、これをまたウマノゴツク、あるいはウマノオコワ（馬の強飯<sup>こわめし</sup>）という名もある。ゴツクは御<sup>ご</sup>供<sup>くう</sup>で神に供える飯、即ちまた強飯のことだという。この種の命名の動機が既に古く、いかに祝日の飯がうまかつたかもこれでよくわかる。この草の地方名も非常に数が多く、また大<sup>たい</sup>抵<sup>いてい</sup>の人は今でも忘れずにいる。奇抜な例を挙げると信州の北安曇郡<sup>きたあづみ</sup>でこれを雷<sup>へそ</sup>の臍<sup>へそ</sup>、これただ一つでは何<sup>なに</sup>故<sup>ゆえ</sup>かを知るに苦しむが、他のと比べて見ると意味は「取りにくいもの」というにあつたらしい。すなわちこれなどは一つの謎であつて、童児の考案とは見られぬのである。杉菜<sup>はたけ</sup>が畠<sup>はたけ</sup>に入ると農夫は皆困るのは、その根がどこま

でも深くて手ではとても抜き切れぬからで、それでまた地獄の鉦ねひも紐ねひも（伊豆賀茂）、地獄の釣鉤つりかぎ（駿河庵原いはら）、地獄の鉤つるししだ（同志太）、あるいは地獄の自在鉤じざいかぎ（大隅肝属おおすみきもつき）などの名も各地にあつて、地底の国の炉の鉤の紐だなどと、困りながらも農夫がしやれたのである。

スギナという名称はこの草の形からと解せられている。九州では筑後久留米、肥前の島原半島などでマツナグサ、または松菜ともいう例があり、杉または松に似た菜という意味で、使っている人も多いのだが、それにも今一つ以前の理由があつて変遷したものととも考えられぬ事はない。たとえば淡路の浦村では杉菜でなくツギナ、磐城の相馬ではツギグサ、紀州の有田郡ではツギツギグ

サ、その他ツギノコ・ツンギノコなどと、呼んでいる村は関東にも多い。こういうえば誰でも心付くことであろう。この草は莖の節ふしが柔やわらかで、袴はかまの所からちよつと引けば切れる。それを元の通りに袴にさし込んで、「どこ継いだ」と言つて相手の兎に当てさせる遊戯は、今も東京の郊外をあるいても見られる。それ故にまた信州北部から越後頸城くびき地方にかけてこれをドコドコグサといい、飛驒の高山では直接にドコドコツイダを以てこの草の名としている。仮にスギナという語が前に出来ていたにしても、子供はなおこれをツギナと呼ぶずにはいられなかつたのである。

私などの幼少の頃には、この草をオスギと呼んでいた。そうして野に出て土筆つくしを採る際には

ホウシ誰の子 お杉の子

お杉たれの子 ホウシの子

という歌をよく唱えてあるいた。卵と鶏との譬えたとにも似ているが、この奇妙な歌の心は、子供にも半分わかつておかしかった。ホウシは即ち土筆の方言であるが、同時に男の子または老入道をもそういつていた。お杉と法師とが全く面おもざしを異にして、同じ根同じ土から前後して生れて出ることが、昔の人には珍らしかったのである。露ふきの姑しゅうとめ女みようがだの茗荷の子だのという言葉は他にもあるが、杉菜もそれと同様に肥後ではツキボシノシンルイと呼び、またツクノオバと呼んでいる処もあるのである。

土筆は東京附近ではツクシンボといっている子供が多い。今の

本名もツクツクシだが、このツクシにはもはや「継ぐ」という意味はなく、みおしるし漚の標のミオツクシなどと同じに、土に突立てたぼうぐ杭いのことに解しているらしい。とんでもなく大小の差を無視した点から見ても、これも子供の思い付きであつたことがわかる。私たちもまた時々はツクツクボウシともいって、ひぐらしという蝉の鳴く声までを、この植物の名のように聴いていたこともあつた。しかしホウシだのボンサンだのというのも、古くからあつた名と思われて、関西地方は一帶にこれであり、彼岸坊主という言葉などは、弘く九州四国にも及び、東の方では越後などもボウズボウズまたはキキンボウといい、遠州の磐田郡ではヨロボウシともいっている。ヨロボウシは謡曲の「よろほし弱法師」にもあるように少

年のことであつた。はかまを着て出るということが、殊ことにこういう名に似つかわしく感じられたのである。

こういう色々の面白い名があるにかかわらず、児童はなお折々は古いものに飽いて、新らしい名が出来ると喜んでそれをいよいよとしてゐる。越後でも弥彦山やひこの周囲には、土筆をへびタバコという村があり、また狐の煙草たばこといつてゐる村もある。これは明あきらかに巻煙草というものを、村の子供が見てから後の新語で、しかもまた古来の命名法じゆんいに遵したが依つしたものである。肥前の島原ではキツネンフデ、土筆どひつとも筆頭菜ひつとうさいとも支那しなでいうから、これを筆に見立てるのは何でもないが、わざわざ狐を引合ひきあひに出すところに、日本の子供の昔からの趣味が現あらわれている。殊ことにおかしいのは秋

田県の北部で、このツクシンボを猫ノカモコ、もしくは雁<sup>がん</sup>ノカモコともカモグサともいつていることで、これもあの形をそういう人間でないもののカモに譬えたのである。この地方の人の話に、杉菜の根には鉄分が寄つて、後に小さな円筒形に朽ち残つて溝などに落ちていることがある。それを河辺郡ではカツパノシユンチコというそうである。シユンチは日本の古語シジの訛<sup>なま</sup>り、シジもカモも共に男の児の前のしるしのことで、そういう名をつけて笑つた子供の顔が、目に見えるような気がする。同じ地方にはまた土筆をツベノコという語もある。多分はツギノコ・ツゲノコから転じたのであろうが、ツベといい始めた動機はまた同一であつたように思う。

## 雀の袴

かたばみ（酸漿）を雀すずめの袴という名は、岩手秋田の二県にもまた佐渡にもあるから、新らしい語ではない。もちろん農民がはくハカマの方で、この草の葉が夕方になると、たたまれ折れ重なる形が、袴に似ているからそう名づけたものと思う。近世の野良のらばか袴まは「たちつけ」などといって、はばき（脛巾）と縫い合せて隙間すきまのあかぬものが多くなつたが、以前は膝ひざまでで、形が殊にかたばみの葉と似ていたのである。しかしこういう大小のかけ離れたものを、直すぐに聯れん想そうすることは成人にはちよつと出来ない。

それだけでも少年少女の考案ということが察せられるのであるが、佐渡の島ではまたこの「雀の袴」のことを、チンチンモグサともいい、備前の児島郡こじまでも同じ草をチンチングサ、石見いわみの鹿足郡かのあしではカンカン草ともいつている。昔話のチンチン小袴、もしくは小児の遊び言葉に、こういう文句のあったことを記憶している人ならば、誰でもこの名を聴いて微笑することであろう。雀はこういう小さな袴を、はきそうなものだからそう呼んだのもあるが、別にスズメという語の用いやすかった理由もある。かたばみは支那でも酸漿さんしやうという位で、少し酸味があるので子供はよくこれを咬かんで楽しみにしていた。秋田県の鹿角地方かづのでこの草をマングシカシカと呼ぶのも、マングシは不明だがシカシカはすか

な（酸模）という草の方言だから、やはり酸いという所から付けた名である。志州の越賀こしかなどでもこれをシゴメ、紀州日高郡の奥ではスイモノともいつている。梅干を製するのにこの草を使うという地方もある（『東磐井郡誌』）。島根県の一部または土佐などで、この草を鏡草またはカガミソウというのも、あるいはこの酸味を利用して、これで鏡を磨いていたのではないかと思う。そうすればこの名を付けたのは小児ではない。

この以外にまだ命名の動機あきらの明かでないのは、九州阿蘇あそ付近でコガネグサ、この名は大隅にもあるから弘いのであろう。ツマグレ即ち鳳仙ほうせんか花の花びらを以て、子供が指あかを紅く染めるときに、この葉を交え揉もんで色を出すという。薩摩でガネグサというのも

形が蟹かにに似ているというのではなくて、むしろコガネグサの訛りかと思われる。大和の吉野郡にはダンジリ花という村がある。祭礼の曳屋台ひきやたいの飾りものに、ここではかたばみの花を思わせるものがあつたのであろう。甲州の富士川流域では、この草をネコノチャと呼んでいる。どうしてそういうかは知らぬが、これなども作者は子供らしい。陸中紫波郡しわではアケズノママ、アケズは蜻蛉とんぼのことだから、単に野外にある飯に似たものということであろう。千葉県印旛沼の附近でもトンボグサ、石川県にも元はトンボノキユウリという方言があつた（『本草啓蒙』一六）。この草の実は少しく胡瓜きゅうりに似ていたつて小さい。やはり子供らしい名の付け方である。信州の上田附近では雀の盃というのがこの草の方

言であり、越後でもスズメノサンシヨウ・スズメノカンシヨウまたはスズメグサ等、雀ちなに因ちなんだ名が多い（『新潟県天産誌』）。サンシヨウは多分酸漿の字音であろう。むつかしい本名を聴いても、すぐに自分たちの面白いと思う形にかえてしまうことは、かまきり（蝟螂）をオガミトウロウなどといった例が幾つもある。

## 猫の枕

うつぼぐさは花の形が、弓の鞞うっほというものに似ているからの名というが、子供は久しく鞞などというものを見たことがないから、幾ら発音しやすくともこの語を使わず、やはり自分たちの覚えや

すい新名をこしらえた。たとえば愛媛県の上かみうけな浮穴郡でネコノマクラ、長野県の埴はにしな科郡などで蛇の枕、青森県の一部でホエドノマクラというのが、共にこのうつぼ草のことである。ホエドは乞食のことで野に寝るもの、以前の田舎の枕がこの花のように、幾らか角張って坐りをよくした長い形のものであったことが想像せられる。福島県の東白川郡ではツチンボグサ。ツチンボは藁わらざい細工の藁を打つ木槌きづちのことで、これも幾分か形が似ていると言われぬことはないが、こちらはあるいはうつぼぐさの訛り、もしくは誤ってそう解したものと見られる。

## 狐の剃刀

東京の郊外で彼岸花、俳諧で曼珠沙華まんじゆしやげなどといっている草の葉を、奈良県北部ではキツネノカミソリ、摂津せつづの多田地方ではカミソリグサ、それからまた西へ進んで、播州でも私たちは狐の剃みそり刀と呼んでいた。以前の児童は「さかやき」を剃そられて痛いことを覚えているので、剃刀というものに関心があつた。それと形の似たもので、野外に多く伸びている草だから、そう名づけたのも自然である。岡山広島の二県、紀州の熊野地方でも、彼岸花を狐草または狐花といっている処は多い。単に原野の草という以上に、この植物の繁茂するのが、多くは淋さびしい気味の悪い場所であつたことも、狐という名を付けた隠れたる動機ではなかつたかと

思う。島根県などの例で見ると、出雲いづもの方は一般にキツネバナと

いい、石見の方では多くはエンコウバナと呼んでいる。伊予の周し

ゆうそう

桑

郡でもエンコ花という者があつて、エンコマまたはエンコウ

はこの地方一帯に河童かわづまのことをさういう。即ち水のほとりの、河

童でも出そうな土地に咲く花という意味である。紀州の田辺附近  
では、こうほね（骨蓬）のことをゴウライの花という者もあり、

またこの彼岸花をゴウラバナというものもある（『和歌山県誌』）  
。

自分たちの郷里では、子供はこの植物について三つの名を知つ  
ていた。その一つは前に挙げた狐の剃刀で、これは専もっぱらその葉を  
さしていい、次にはジュズバナ、今一つはテクサレであるが、こ

の事は後でいっしよにいう。ジユズ花というのはこの花の茎を折って、じゆず珠数の形に真似まねて首に掛けて遊ぶからで、播磨はりま一国だけでなく三河の宝飯郡・石見の邑智郡等にも同じ語がある。

九州では大分市の附近などでオリカケバナ、やはりこの草の花茎を細かく折って、珠数にして首に掛けるのでこの名があるという。熊本県の南部でケサカケ、嶺を越こえて宮崎県の西隅でもケサバナというのは、やはり同じように折って首に掛ける風があったからと思う。こういう不吉な名が出来たのにも理由があつたらしいことは、おきのしま隠岐島の一部または瀬戸内海の島で、この草をソウレバナというのを見ても察せられる。

関東でも群馬その他の地方でジャランボングサといい、ジャラ

ンボンは即ち葬式のこと、墓地の近くにこの花が多いことから出た名だといっている。日向ひゆうがも都みやこの城じょうの辺ではジゴクバナ、壱岐いっきの島ではゴシヨウバナ、後生というのも墓地のことをいうらしい。遠州北部の山村でワスレバナ、信州佐久地方にはワスレグサという名もあるが、これなども本来は墓の上に生ずる草という意味であつたらしい。埼玉県の東部で幽霊花またはシンダモンバナ（『幸手さって方言誌』）。徳島県の方にもユウレンジサまたはチャンチャンボなどという異名もある。あるいはこの地方から高知県へかけて、シレイまたはシレイグサというのも、死霊草の音のようにいう説もあるが（『土佐の方言』）、これだけはそうでないと思う。阿波でも吉野川の上流ではシロイ、隠岐の島にもまたシ

ロエの名があり、対馬つしまでもこの草の葉をオシロイグサというを見れば、シレイは必ずしも元の音とも言えない。名の起りはむしろスミラ（つるぼ、綿棗めんそうじ児）と関係がありそうである。スミラは土地によつてまたスブラともいい、花はちがうが根の形が似ている。または何々スブラという名が、元は狐の剃刀の方にもあつたのであろう。

播州も西の境では、この草をシビト花ともいうが、またシブラ・シビレ・シブライなどとも呼んでいる。この植物の汁液が唇などに附くと刺戟しげきするので、この語を痺しびれの意味に解したのであろう。

大和の竹之内村などではテクサリまたはシタコジキ、富士山南

麓地方は一般にハコボレグサといい、子供はこの草を口に入れると歯が抜けるなどと嚇おどされており、あるいはまたハツカケバナ・ハツカケバアサンともいう者もある。信州の南部でも歯抜けばばアといい、この花を折っただけでも歯が抜けると信じられていた。九州も大分県の南海部みなみあまべ郡ではハカゲバナ・ハモギ・ハンモゲ・歯抜けばばら等の異名がある。いずれも小児を警戒するためらしいから、作者は成人であつたことがほぼわかる。

テクサリという語の方は、あるいは子供の実験だったかも知れぬが、私たちは手が腐るなどといいながらも、いつも折って遊んでいた。テクサリという名は私の郷里だけでなく、近畿では処々に行われているようだが、伊予の大三島おおみしまなどではこれをテハレ

グサ、紀州の尾鷲<sup>おわせ</sup>ではヒゼンバナといっている。ヒゼンはいやな皮膚病の名で、実際この液がつくと指の股<sup>また</sup>が白くなる。

四国では伊予から土佐の西岸にかけて、ホゼバナという名がある。ホゼルはかぶれることで、現にまたカブレ花という土地もある。紀州の西部でこれをドクホウジまたはニガイホウジというのも、ホゼと一つの語だったらしいが、今ではその意味を忘れている処も多く、鳳仙花<sup>ほうせんか</sup>と混じてホセンコなどという例もある。

石見の津和野<sup>つわの</sup>附近ではヤクビヨウバナまたはドクバナ、あるいはニユウドウバナという村もある。ニユウドウは癩病のことで、よくよく悪い名をつけて子供を遠ざけようとした形跡がここにも見られる。

しかしこの花の見た目に美しいことは忘れることが出来ない故ゆえに、単にそういう感じから付けた名も、また方々で拾うことが出来る。意味の取りにくいものが他にも幾つかあるが、それだけは除いて置いて、豊後のひがしくにさき東国東郡でイカリ花というなどは、大分古くからあるが面白いと思う。實際花卉のそりかえった様子が少しばかり船の碇いかりと似ている。石見の大森でチンチンドウ口というのは、河内の南の方でオミコシというのと共に、その祭礼の飾りものと似ていたからであろう。

香川県のある島で、デベソでべそというのは出臍でべそのことらしく、またその近くでネコグルマというのも興味がある。猫車は近世支那から輸入した一輪車のことで、どんな幅の狭い田の中の路でもある

くから便利なものだが、我々はそのきいきいと細く軋きしる音を形容して、こんな変った名を付けていたのである。それを更に同じ田畠の間に咲く車形の花に、転用したのは快活な態度であつたが、これも恐らくは何か人間以外のものの名を冠する風習が、隠れて下に働いていたのであろう。狐がそういう中でも最も数多く、引合ひに出されることは前に述べた。福井地方にはまたキツネノタイマツという名も元はあつた。今でも覚えている子供はあるかどうか知らぬが、これなどは殊ことに美しくまた鮮あざやかな空想であつた。彼岸花の真赤に咲き連なる光景は、そういわれて見るとなるほど炬たいまつ火行列を思わせる。あるいはまた狐の扇とも狐の嫁ごともいう方言があつたということだが（『本草啓蒙』九）、この「嫁ご」

もやはり嫁入の行列からであろう。野原に火の光のつづくのを、狐の嫁入のようだということは今でもいつている。

## ペンペン草

子供が古い名に飽きやすいこと、または誰よりも鋭敏に新らしい名の面白さに共鳴することが、物の名の盛んに変化し、また地方的にまちまち々になる昔からの原因だったようである。それだからそのただ一つを正しい名とし、他をまちがいとすることはいよいよ道理がないと、私などは思っているのである。なすな薺のたけたのをペンペン草ということは、東京の人たちもよく知っているが、何な

にゆえ

故にそういつたのかは、もうそろそろと忘れかかっているらしい。ペンペンは三味線しゃみせんのことで、最初はその音によつて小児がつけた名であろうが、後には親兄弟でも、市中の人たちはこの語を使っていた。三味線とは言つても、実はこの草の三角形をした種実が、この楽器を弾く撥ばちのかっこうに似ていたからの名である。以前の三味線の撥は琵琶びわのそれのように、今少し中がくびれて先が開いていたのではないかと思う。熊本県の玉名郡たまなではこの草をネコンピンとっている。実の形が三味線の撥に似ているので、小児はこれを採つて左の手の母指おやゆびの爪に当てて、三味線を弾くといつて戯れ遊んだ。山口県の厚狭郡あさでは「猫の三味線」と呼び（『防長史学』四卷二号）、愛媛県の周桑郡でもシャミセン草、

またはチロリンといつている。中央部殊に京阪などには今はもうこの名はないが、遠く東北の端に行つて、岩手県の九戸郡くのへではサミセングサ、秋田県にも同じ名があり、またシャミセンコという村もある。北秋田郡では「狐のシャミセンコ」ともいつている。三味線は江戸期の初めには、まだ関東の人は名を知らなかつたという話が、『醒せい睡すい笑しょう』という書にも見えている。それがもうこのような端々の土地にしか残つていないのは、草の名の進化の速度がどんなに早かつたかということを考えさせるのである。

無論新旧色々の名の流布も、土地によつて状況が一樣でなく、あるいは入り交りあるいは再び古いものが復活し、また二つ以上を抱えて楽しんでいたこともあつたらうが、大体に都府の近くに

あるものを、新らしい流行と見てよかろうと思う。『物類稱ぶつるいしやう呼』は百七八十年前の採集であるが、その中には薺を尾張あたりで爺の巾きんちやく着やく婆の巾着といひ、奥州津軽では雀のダラコといふと出ており、前の方は知らず、ダラコの方は今でもその通りである。巾着もダラコも同じもので、巾着の形は近い頃まで、口を括くくれば薺の実のように三角になるものが、子供や年寄に愛好せられていたのである。その小さなダラコには錢を入れて下げてあるのが、彼等には大きな印象であつた。今の青森県の人たちは、ダラーという英語を早く知っていた証拠にこれをしたがるが、気の毒ながらあの地方のダラの中に入っていたのは、弗貨ドルどころか穴のあいた小錢がせいぜいであつた。それで現在はあの地だけは

銅貨をダラなどといっているが、この通り古い時代から既に巾着はダラであつたので、それは革で作つたのを胴どうらん乱などというのと同じ心持から、元はだらりと垂れるからの名だつたらうと思う。雀の子が持つダラならば、薺の実ほどの大きさでちようどよいと見たのである。

それから今一つ、これはもう少し古いかと思う名がある。越後は『新潟県天産誌』を見ると、土地によつて薺に色々の名があつて、その中にはダラまたは巾着というのはまだ見当らない。最も多いのは三味線花、またはペンペン草というので、次にはまた軍配草というのものもある。これは他の地方にあるか否かを知らぬが、やはり実の形を軍配という扇に見立てたのであろう。その次には

ガラガラグサ、また鈴草というのがある。ガラガラは信州長野の附近でもそういい、また他では実の形のこれと似た植物の名になった例もある。たとえば「たけに草」などもその一つで、一本の茎から幾つも下<sup>さが</sup>つている形を、鈴のようだと思つてそう名づけたのである。この形の鈴は三番<sup>さんば</sup>叟の舞ぐらいにしか今はもう見られないが、備前の邑<sup>おく</sup>久郡でもこの草をコンガラ様の鈴と呼んでゐる（『中国民俗研究』二号）。コンガラ様はこの地方でしか名を聞かぬ一種の巫女<sup>ふじよ</sup>で、祈祷<sup>きとう</sup>のために舞う者であつたが、今はもう絶えているらしい。これが薺の花茎のような鈴を振つていたことは、たつた一つの草の名によつてわかる。コンガラというのも、恐らくはその鈴の音に基づいた言葉であろう。

## 繪具花

自分などは子供の時に、鴨跖草つぎくさ即ち「つゆくさ」を、蝨草ほたるぐさともギイスグサとも呼んでいた。ギイスはきりぎりす、蝨ぎす、はた織虫のことであり、蝨草の名は東京でも知られている。この二種の虫を籠かごに入れて飼つて置くのに、何か青いものを添えて蔭と涼しさを供与する料に、特にこの草を選んだので、自分等は虫がこの草を食べるものと心得ていた。信州や越後でこれをトンボグサというのは、花の形が蜻蛉とんぼに似ているからだとの説もあるが（『高志路こしじ一卷一〇号』）、そう似ているとも我々には思えない。

あるいはこれもまた蜻蛉のまくさとして、籠の中に入れたからの名かも知れない。佐渡には七八つもこの草の異名があるが、その一つにダンブリバナがあり、秋田県でもダンブリ花、またドブリ草ダンブリ草の名もあって、そのダンブリ・ドブリは蜻蛉のことである。あるいはダンブリに食わせる草だからともいつている。壺岐いぎでこの草をチンチロ花、鹿児島でチンチロリングサ、信州の上伊那かみいなでもチンチロ花というのは、やはり松虫の籠の草だったからかも知れない。

しかし命名の動機は案外な所にあるものもある。子供の心になつて見ないと確かなことは言えない。そのうちで大よそ判るわかのは、佐賀県藤津郡ふじつでトテツポツポという名などで、ちよつと鳩の

ことのようにも聴きこえるが、伊予の周桑地方でケケコウロウともい  
い、この方は一名ニワトリ草ともいうから、実は花の形が横から  
見たにわとり雞に似ているのでそうだったのである。佐渡ではまたトツト  
バナ、信州でも伊那では鴨跖草がトテツコ花であり、またオンド  
リ花ともいうが、筑摩郡ちくまへ行くと萱わすれぐさ草がトテツコウまたはト  
テコツコである。この方は花よりも葉が雞に似ているかららしい  
が、越後の出雲崎いずもぎきではふじ豆、即ち上かみがた方でかき豆という豆が  
トテコウロウで、これは鶏けいとう頭という花の小片を莢さやの割れ目に挟  
み楊枝ようじを足にして、実際に雞をこしらえて玩具にしている処もあ  
つて、それほどにもよく似ているのだから、こう名づけるのも自  
然であるが、つゆ草の方に至ってはよほどまた子供の空想が加わ

っている。

和歌山県の東牟婁郡ひがしむろでつゆ草をヒカリというのは判らない。

佐渡の二宮村にくうにはメグスリ花という名もあるから、何かもう忘れてしまった言い伝えがあるのであろう。駿河の志太郡しだなどはこの草の花と、蠅はえの頭とを女の乳ですりまぜて、赤く色つけたものを目薬として使うという。しかも草の名の方はここでハナガラといっている。それから同じく佐渡の一部にカタグロ、もしくはジンジクロという名もあるが、これもまた不明である。四国の方では讃岐ではカマガサ、何だか葉の形が鎌に似ているからのような気もするが、これははなは甚だ確かでない。伊予の方に行くとき雀草、また卵草の名がある。これはあるいはこの草の実が小さいけれども鳥

の卵と似ているからであろう。卵草と名づけられた草は他にも色々ある。従つてこの名はあまり弘くは行われていない。豊後の大野郡では鴨跖草をまんじゆう饅頭ぐさ、伊予の周桑郡でも、卵草と併存してまた柴餅草という名がある。柴餅は五月節供せつくの日に作る餅で、いわゆる亀の子ばらなどの葉に包んだ餡あんいり入の餅であるが、これなどはたしかによく熟した露草の実が、葉苞はづとに包まれた形と似ている。ハナガラという名の起りもわからぬが分布は弘い。右に挙げた静岡県中部以外に、木曾でも伊勢でも遠く離れた山口大分の二県でも、露草をハナガラといい、東北は仙台以北、登米地とよま方にかけて同じものをネコノハナガラと呼んでいる。ハナガラはあるいは飼牛の鼻に通す「鼻づら」または「鼻ぐり」というもの

のことでないかと思うが、この花の形がそれに似ているということとはちよつと言えない。とにかくに少し変った形はしている。それで津軽の方へ行くと、これをまたネコノベベともいうのである。帽子花という名は名古屋あたりに古くあり、今でも信州の南部には残っている。巾着花という名もこの地方にはある。それよりも一段奇抜なのは、名古屋と富山県の一部とで、露草をコウヤノオカタといっていることである。オカタは人の家の主婦のことで古い語である。紺屋こうやの細君だからあのような好い色に、自由に染めて着られるという意味で、つまりこの花の色彩のすぐれて鮮かあざやに美しいことをめでた言葉だから、これだけは小児のウイツトには少しばかり荷が勝っている。近世染物の技術と材料が新たに普

及した際に、最初に流行したのがこのコバルト系の色であつたことは、記録や民謡に段々の証拠がある。あるいは日本人のもとから大好きで、しかも力の及ばなかつた色だつたかとも思う。長門ながとの豊浦郡でつゆ草をハナガラまたはハナダ、豊後でもハナガラまたはアイクサ、信州の下伊那地方でもこれをエノグバナ、またはソメグサとも呼んでいる。歌にも詠まれたこの草の古い名にツキグサがある。字では月草とも書いて露草の露と対照させているが、事實は衣に摺すり附けることが出来るから附き草で、それ故にまたウツシグサとも呼ばれていたのである。今でも女の児がこの花の色を。紙に取つて楽しむ遊びがある。すなわちつき草は特に附きやすい花だったのである。稚おさない人たちの新しい名を好む癖は、こ

の方面にも明かに現われている。例えば秋田市の附近から角<sup>かくのだ</sup>館<sup>て</sup>の辺へかけてダンブリ花またインキグサという名が既に行われている。この語がインキの田舎に入った時より、前からのものでないことは誰でも認めるだろうが、あるいは同じ科の中の「むらさきつゆくさ」がインキ花だという土地も北信などにはある。花の汁が紫インキのようだからというが（更<sup>さら</sup>級<sup>しな</sup>）、この新らしい外国産の草を、紙に染める遊戯があるか否かを私はまだ確<sup>たしか</sup>めていない。

## ハゴジヤ

東京では「猫じゃらし」といつているえのころ草を、越後の西に頸城郡ではネコソバエ、三河の東加茂郡ひがしかもでも同様に猫そばえしくびきといっている。ソバエルは猫でも子供でもふざけることで、この草の穂を取って板の間などでまわすと。猫が興味をもってじゃれつくからこの名が出来たのである。えのころ草の名も狗いぬの子だからこれに近いように思われるが、こちらは戯れ遊ぶこととは関係なく、単にむくむくとした毛の样子が、子犬を聯れん想そうさせるからそういったもので、泉州でイヌグサというのも同じに、むしろ漢名の狗尾草くびそうという方に命名の動機が一致している。子供の考案に成った地方名が、この草にも幾つかある。信州小ちいさがた県郡ではココログサ、九州の方にも肥前のイヌココロコなどがあつて、え

のころ草という名のこれと同列のものであったことを思わしめる。コロコロは本来狗を喚ぶ言葉で、多分は「来よ」という語の改造であつた。関東地方を始めとして、今でもにわとり雞を喚ぶのにコロコロという処は多い。そうして雞はやせ瘦ぎすであり、また引締まつているのだから、ころころしているからエノコロだと思ふのは当らない。小児はいつでも人の喚ぶ言葉を聴いて、それを相手の名前だと思ふ傾きがあるから、すなわちこれもまた元は「犬来よ」であつたことを察し得るのである。中国地方におけるえのころ草の方言を見ると、備前ではトートコ、備中はトートーボ、備後ではトートーグサ、すおう周防にはまたトトコグサ、その他これに近い語がわず僅かずつの变化を以て行われ、そのトトコ等は、すべて皆こいぬ小狗のこ

とである。一方にはまた我々のいう猫ねこやなぎ柳、春さき銀色の柔やわらかな毛で蔽おおわれた若芽をつけて、それがまたやや猫か犬かの形に似ているものも、山陰その他のかなり弘い地域にわたって、これをトウトという者があり、あるいはまたカワラノコチコチなどという地方もある。名は殆ほとんど同じでも形はさほどえのころ草と似ていないが、これを小犬といただけが両方に共通なのである。犬をトウトというわけはコロコロも同じだろうと私は思っている。雞を喚ぶ声にもトウトウというのを見てもわかるように、これは疾とく疾くの音便であつたのである。人に対しても「朝はどうから」とか、「とう行つてとう来い」とか、以前は疾うと柔らげて使うことが多かった。三つ四つの幼児をつれた親たちが、小犬にとう

とうというのは自然なことで、それを聴いている者が彼はトウトと呼ばれるものと、解したのもまた異とするに足らず、トートコのコなども「来い」であつたと思う。鶏はトリだからトトというのだと心得ていると、魚の煮たのをもやはりトトというのである。これなどは早く下さいを小児がとうとうといったからで、魚の名の片言と見ることは出来ない。それから段々と明かあきらになつて来ることは、青森県の五戸ごのへ附近では、えのころ草の名がハゴジャであつて、次のような盆踊歌がかつては行われていた。

ことし始めて粟あわの草取つたけや

粟とハゴジャのわけ知らの（ぬ）

このハゴジャも中国のとうとうと同様に、「早うごじやれ」を

粗末にいった語で、すなわちこの地方では今はとにかく、前にはえのころをハゴジヤと喚んでいたので、それがこの粟とよく似た草の名にもなったのかも知れない。ハグサという標準語は合理化とも考えられるが、この盆踊唄は無論恋の歌であり、これを歌ったのは少女よりも男たちだったかも知れぬが、とにかく彼等は忠実に小児の発明した適切なる草の名を、大人になってからまで守っていたのである。

## 山の筆

常陸ひたちの筑波山つくばさん下では、白頭翁はくとうおう即ち「おきなぐさ」を、男の

児はヤマノフデといっていることが、横瀬夜雨君よこせやうの随筆にも見えているが、新作であろうと思う。この草の花穂に水を含ませると、板扉などへ字が書けるというのは、無論小学校が出来てからの経験にちがいないからである。

それ以前の子供の遊びは、この花の長く垂れたしべを髪に結び、またはその形のままを髪の垂れた人に見立てて玩もてあそぶことであつた。

多くの地方名はこれから出ている。大体に色が灰白なので老人に見立てたものと、長くつやつやとしてるので少年に擬した名と二通りあり、なお『本草啓蒙』や、『増補俚言集覧りげんしゅうらん』によれば舞を舞う人の姿にたとえたものも元は多かつた。たとえば、飛驒でモノグルイ、備中でもキツネコンコン、加賀・越中でオニ

ゴロというのもこれであり、筑前その他でゼカイソウといったのは、疑いもなく能の是界坊ぜがいぼうから出ている。

富山の近傍でチゴノマイ、またはなま訛つてチグルマイなどというのも、かつてそういう舞を、面白く見た者の聯想であろう。

信州の犀川さい水域では、今でも一般に白頭翁をチゴチゴと呼んでいるが、果してチゴが童児であることを、意識しているか否かは疑わしい。下水内郡しもみのちではこれを誤つて、チンコ口花という処もあるのである。この名称の領分はもとは弘かつたようである。たとえば水戸ではオチゴ花、下野しもつけではチチコまたはカワラチゴ、仙台でもチチンコといつていたというが、今ではもう行われておらぬかも知れない。九州の方では薩摩でウネコ、豊後でオネゴ、

肥後にはオナイコの名があつて明かに「うない子」<sup>あきら</sup>であるが、これもその意味が既に不明になつて、福岡県などではネコバナ・ネコグサなどと猫だと思つてゐる者も多くなつてゐる。ちごが頭髪を「うない」にしていた時代は過ぎて年久しく、またそういう語も用いられなくなつてゐる。カブロという語はこれに代つて現われ、髪を切つて頸<sup>くび</sup>のところまで垂れたものが皆カブロであつたのが、後にはこれもある種類の童女だけの名になつてしまひ、普通の子供にはオカツパといい、またカンバともガンボウジともいうようになつた。翁草をカブロという処が、伊賀にも木曾にもあつたと『啓蒙』には見えてゐるが、現在もそうであるか否かを知らない。諏訪郡<sup>すわ</sup>の一部豊平村<sup>とよひら</sup>などでは、オツカブロウノチンゴン

バという長い名で呼んでいるというが、チンゴンバは即ちチゴ花だから、これにまたオツカブロの語を添える必要は実はなかつたのである。ガンボウジというのは、この地方では蒲公英たんぽぽの花の白くなつたものことで、同時に人の頭の散らし髪のことでもあるが、群馬県の方へ行くと、これがまた翁草の名として用いられているという。髪に見立てた動機は皆一つでも、古い命名の趣意が不明になると、やはり新しいものを以てこれに置き換えようとするのである。

東北にも白頭翁の地方名は数多く出来ているが、ここでは奇妙にチゴ・ウナイゴにたとえたものがなく、全体に老人殊ことに老女に見立てた名が多い。旧南部領なんぶにはウバガシラとウバシラガという

のと二つあって、姥うばしら白髪の方が印象は深いが、私は姥うばがしら頭の  
 方が舞の姿から出た名で、一つ古いもののように思っている。

『秋田植物方言』によれば、この地方にはまたウバケヤケヤ、も  
 しくはただケヤケヤといっている村が多い。この草の葉に触れる  
 と痒かゆくなるので、あるいはママコノシリヌグイともガモコワシと  
 いう名があるから、ケヤケヤもまた痒い痒いの意だという人もあ  
 るが、この説はまだ十分に安全でない。あるいは何か今一つ古い  
 名があつて、それがこういう形で残っているのかも知れぬと思う。  
 青森県にも土地によつてツブツケとかヤツレグサとか、なお二  
 三の別系統の名が採集せられているが、大体に東北では老人に見  
 立てたものが多く、チゴバナ・ウナイコという類の名が殆ほとんど行わ

れていないのは、何か理由のあることのようにである。あるいは児童の髪を切つて垂らす風習が、この地方にはなかつたのではないか。

そんなら婆さんのこんな頭をしたのが、特に奥羽の端々に多かつたかというと、これはそうではなくしてむしろ姥頭というような姿で舞う舞に、印象の深いものがあつたためかと想像している。そういう舞がもうなくなつて、姥という名ばかりが記憶せられると、後には福島県の各地のように、カワババだの川原の伯母さんだのという名が、改めてまた考案せられるのであろう。

これとよく似た命名は支那で白頭翁、日本でも翁草などと、何な人んぴとにも合点がてんが行くから以前はあつたかも知れぬが、現在は西の

方には殆ど残っていない。出雲の大原郡にはヤマシババというのがある。安芸ではジイガヒゲ、四国にはジョウドノという名が元はあったというが、今はどうであるか知らない。ジョウというのも老翁のことである。

しかし子供には名のおかしみよりも、遊びの楽しきの方が大きな魅力だったかと思う。茨城県の真壁<sup>まかべ</sup>地方では、女の児はこの草の花を実の入らぬ前に採って来て、毛を二つに分けてきれいに髪を結び、小さな赤い人形を着せる。それでオチゴカンバという語がなお残っている（『雪あかり』）。カンバもやはりカブロのこ<sup>てまり</sup>とである。信州の北安曇<sup>きたあづみ</sup>郡では種子を集め丸めて手毬<sup>てまり</sup>にする。それでチゴチゴ花・オツカブリの外<sup>ほか</sup>にまたテンマリバナという新

らしい名も出来ている（『郷土誌』卷三）。あるいはフデグサという名がここにもあるというが、ここでも多分小学校の子供が、これで板扉などに落書することが流行し出したのであろう。

## 爪紅草

二通りの全く反対な名の付け方が、殊に草の名については注意せられる。一方に非常に適切な、誰が聴いても笑いたくなるような名があるかと思うと、他の一方には意味もなくまちがえて使っている草の名も多い。この矛盾はまた児童の癖であろうと思う。即ち遊戯の興味の忘れ難いものは、いかなる名であつても覚え、

名前の面白さを楽しみに行っているものは、その方にのみ気を取られる。つまり淋しい昔の子供たちには、名を唱えるだけでも一つの遊戯であつたのである。今度は前の方の例を一つ挙げて置きたい。

鳳仙花ほうせんか

在は全国裁うえておらぬ土地もなく、その名前がまた非常に變化している。高知県の一部でホウカンシヨ、埼玉県の妻沼めぬま辺ではホシンカン、岩手県ではコウセンクワあるいはコセンコあきらというのは明かに片言であるが、秋田県の各地でエングワンコまたはエングワ、山形県に行くわかと荘内でも最上もがみ郡でも、共にレングワと呼んでいるのは判わからない。遠く離れて鹿児島県の種子島たねがしまに、エングワとい

う名があるというのがもし事実ならば、何か今一つ輸入当時からの名があつて、それが東北の一隅には伝つたつていのである。新潟県では『中越方言集』の記載によれば、鳳仙花をツマグレナイまたはホネノキと呼んでいる。ホネノキは骨抜きはじの意というが、それだけではまだ説明にならぬ。あるいはこの草の実が自然に弾はじけて、ひとりで飛んで出ることをヌゲルというのではないかと思ふ。四国では阿波の祖谷山いややまでこの花をノギノギ、土佐でも東部の山村にはこの名があり、あるいはまたノギノ花ノギ流シともいつている。ノギのギというのは麦の芒のギのことで、この草の実の形が麦の穂に似ているからだと、説明しているがそれも信じられない。だからまた「脱げる」という動詞に基づいたノギではないかとも想像す

るのである。

鳳仙花の実がひとりで飛んで繁殖するということは、幼ない観察者にも珍めずらしい現象であつたと思う。九州でも大分市の周囲で、この草をトビグサというのは明かにそれから出た名であり、別にまたトビシヤク・トビシヤ・トビシヤゴなどという名称が、この県を中心に東は対岸の愛媛県、西は熊本県の西端まで流布している。天あまくさ草島では旧暦六月三十日の夏なごし越の行事に泳ぐ風習がある。村によつてはこの花と「かたばみ」の葉とを合せて石の上で搗つき、その液を以て爪を染めてから海にはいり、あるいは棕しゆうろ櫚の葉に紅白のトビシヤゴの花を貫いたものを、女の子などは頸くびに巻いて泳ぐという。即ち河童かっぱの害を防ぐまじないに、ひとりで実を

飛ばすような有力な花を利用したらしいのである。この方言は不思議に分布が弘い。鹿児島ではトツシヤゴまたはトツサゴ、南の境の宝島ではトビシツゴ、沖縄県でも本島はティンシヤグ、またはチングサ、宮古島ではティンザク、八重山諸島ではキンジャク、よなぐに与那国島ではキンタク、はてるま波照間島ではシンシヤクで、いずれもたつた一つだけを聴けば、飛草の変化であることはちよつと気がつかぬが、恐らく飛ぶという特徴以外に、今も天草島などで残っているような、美しくまた印象の深いまじないの方法といつしよに、持つて渡つた名称であろうと思う。東北では羽後の角かくの館だてなどに、この草をゴシヤギトンコという名が独立してある。ゴセヤクは腹を立てること、ちよつと手を触れるとすぐに実が飛ぶのを、

怒つて飛ぶ者と呼んだので、これは西国の方とは無關係に、この土地限り思い付いたものらしい。

この花の紅い汁液で爪を染める風は、支那にもはや夙くあつて長崎を経て入つて来たというのは事實であろうが、日本に弘く行われたのも、少なくともただの真似まねではなかつた。こうして海に入れれば水の物に捉とられぬとか、または草の中をあるいても蛇に巻付かれぬとかいうことを、かつては信じて真劍に実行する者があつたので、後には再びただ少年少女だけの、面白がつてする遊びになつたが、最初の分布にはもつと強力な動機があつたものと思われる。この風習を元にした鳳仙花の地方名は二種あつて、その一つはツマベニ、即ち爪紅である。土佐の西半分にはこれが多く、土

地によつて少しづつ變化してツマベリ・ツワベニ・ツワベリ・ツバメニ・ツバベニ・ツバメリからツバメー、またスバベリとさえいう処がある。今一つの方はツマグレナイ、この方は九州の一部にも行われ、また標準語としても認められているらしいが、余り上品過ぎるためか略してツマグレ、またツマグリソウという者も多く、山口県でも東方はツマグリソウ、西部はツマグレと呼んでいるが、九州は更にその分化が弘く、豊前ではツマグレ、豊後にはまたツマグラという土地もある。佐賀県ではツバメもしくはツバネ、肥前五島などもツバネであつて、これはツマベニの方から分れたかとも見られるが、やはり中間に燕つばめをツバクロという語を置いて考えると、後の方の系統のように見られる。もつと驚く變

化は、奄美大島の古仁屋こにやでダマクラ、名瀬なぜでカマクラ、それからもう一つ變つて隣の永良部島えらぶではハマクラ、喜界島きかいではマンカとまでなっている。南の島々では鎌倉という語に、昔からなつかしい響ひびきがあつた。新たに海の外から入つて来た花に、もしツマクラというような音があつたら、これをカマクラの花と誤るのは自然であつた。この島の民謡として今も記憶せられているものに、次のような一首がある。

カマクラぬ花や手のさきに染めろ

親のゆしごとや胸にそめろ

即ちこの島でもまた鳳仙花は爪を染める花として、娘たちに知られていたのである。鳳仙花という名をそのままに用いている土

地でも、爪を染める子供遊びはまだ多く残っているが、これが成人の化粧でもあったという痕跡はもう見出し得ない。ただ富山県の中部でこの花をケイセバナ、島根県の西端でこれをビジンソウまたはミヤコワスレという名を存するを知るのみである。これ等はもちろん児童の命名でなくて、あるいはただ単に花の色のくれないが、ひなまれ鄙に稀なることをめでてつけたのかも知れぬ。

## 枳割草

かやつり草は莎草などとも字に書いているが、どうい漢語が正しく当るかを知らない。一種なつかしい香があつてこれを折取

ると子供の日の記憶がよみがえって来る。茎が三角なので二人の児が申し合せて、前後ちがった側面から二つに裂くと、縁が繋がって四角な囲いが出る。これを彼等は蚊帳を吊るといったのである。ちょうど初夏の、家では蚊帳を取出す頃なので、この名が印象深くきこえるのであるが、熊野ではこれをマズグサといっている。

広島県の東部でも柵草ますぐさ、播州にはまた柵割ますわりという名があり、山口県の瀬戸沿海でも柵割草といっている。割って柵の形になる草という意味で、柵が農家の児には親しみの多い器物であった以外に、我々にはなお二つのことが考えられる。一つは以前の大柵には対角に棒を張ったものが多くて、これが蚊帳よりも一段とこ

の草の割れ方に似ていたことである。今一つの事実は多くの子供は蚊帳を知らなかった。蚊をよける手段には蚊遣火かやりびは記録にも見えるが、蚊帳の今の形になって常民の家にも普及したのは、存外に近頃のことだったのである。

草の名としてはカヤツリグサの方が響きはよいが、物を知らなければ聴いても興味が少ない。しかも一部の児童はまだ蚊帳の中に寝ない時代から、既にこの語を覚えていたらしいのである。

国語の流伝にはもうよほど古くから二通りの様式があった。即ち体験をした言葉と、暗記をしなければならぬ言葉とで、今日の小学生等は原則としてその暗記の方を強いられているのである。言葉の意味が何の説明もなくして自然にわかる時代には、子供と国

語とは今少し縁が深く、新らしい物の名はこうして草莽そうもうの間から生れていたのである。

## 目はりごんぼ

名を付けるということそれ自身があるいは昔の子供の遊びのうちであったので、このように覚え切れないほどの新らしい名が、次から次へと出来たのではないかと思う。私などの郷里では畠に夏生える草の「すべりひゆ」を蛸たこぐさ草またはタコといていた。これはあの草の茎の色とつやが、いかにもゆで章魚だことよく似ているから誰にでも附けられる名だと自分なども思っていた。多分友

だちの一人がそういう出したのだろう位に考えていた。後に大阪府でも奈良県でも、同じ言葉があることを聴いて、むしろ遠方の一致を珍らしく感じたことである。下総の利根川とねべりに来て見ると、子供は皆この草をヨツパライと呼んでいた。これは抜き棄てて少しの間置くと、茎の色が著しく赤くなるからの名で、やはり遊びながらも自然に付けられるほど手軽な名だが、関東では他にもそういう土地が多いようである。一人が発明してそれが遠くへ運ばれたのではなく、そこでもここでも別々にそう呼ばずにはいられなかったのではないかと思う。とにかくにどんな子供にでも、気がつかずにはいられぬ色の変化であつた。大和はタコグサの名がよく知られているが、宇都宮などではまたこれをアカゴンボ、

もしくはアコナレゴンボともいつている者がある。赤うなれ赤うなれと唱えて待つていた児童の遊戯が想像せられる。あるいは夕コというのも元はこの草の莖を水に浸<sup>つ</sup>けて、章魚をゆでるという遊びがあり、それを私たちがもう忘れているのかも知れない。

コンボは九州の北部、筑後の三池郡<sup>みいけ</sup>などで、メハリコンボというのがまた「すべりひゆ」のことである。ここにも以前は赤うなれゴンボという遊びがあつたか、あるいは別にこの草をコンボという名が古くからあつたか、いずれかでなければこの東西の一致はあり得ないと思う。メハリというのはこの莖を短く切つて、それを<sup>まぶた</sup>瞼の上下にあてて目を張る戯れがあるからである。

私などの幼ない頃には石<sup>せきしやう</sup>菖<sup>しょう</sup>という草の穂を取つて、これを

つっぱりにして目を張り、よつてまたこの植物をメハジキといつていた。大分別府べつぷの近くではメツツパリとも呼んでいる。何でもないことだがこれで目まばたきをせぬようになると、ちよつと變つた顔に見えるのを興じたのである。

コンボは小坊でこの遊びとは多分關係がなく、新旧二つの名の結合と思われる。東北は一般に、小児がだだをこねることをゴンボホルといい、あるいは酔人が管くだを巻くことをもそういう処があり、後の方が古くからあつたようである。

今でも牛蒡ごぼうを掘るといふ感じに使われているが、事によつたらこのゴンボは酔っぱらいのことであつたかも知れない。南大和のアカゴンボという名称なども、それだとその起源が大よそはわか

つて来るのである。



## 青空文庫情報

底本：「野草雜記・野鳥雜記」岩波文庫、岩波書店

2011（平成23）年1月14日第1刷発行

底本の親本：「柳田國男全集 第十二卷」筑摩書房

1998（平成10）年

初出：野草雜記「短歌研究 第五卷第四号」改造社

1936（昭和11）年4月1日

蒲公英「いぎやう 第九卷第二、五号」御形詩社

1930（昭和5）年2月5日～5月5日

虎杖及び土筆「民族 第三卷第五号」民族発行所

1928 (昭和3) 年7月1日

董の方言など「地上楽園 第二卷第七号」大地舎

1927 (昭和2) 年7月1日

草の名と子供「愛育 第五卷第一〜五号、第十号」恩賜財

団愛育会

1939 (昭和14) 年1月1日〜5月1日、10月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」(区点番号5-86)を、大振りにつくっています。

※「蒲公英」の初出時の表題は「野草雑記」です。

※「虎杖及び土筆」の初出時の表題は「虎杖及び土筆(方言の小研究 三)」です。

※「野草雜記・野鳥雜記」は1940（昭和15）年に甲鳥書林から柳田國男の装丁により出版されましたので、表題を「野草雜記・野鳥雜記」とし、副題を「野草雜記」としました。

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2013年5月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.w.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 野草雑記・野鳥雑記

## 野草雑記

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 柳田國男

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>